

第 59 回国際学生会議
事業報告書

日本国際学生協会

目次

第1章 国際学生会議

実行委員長挨拶.....	2
開催目的	3
国際学生会議の沿革	4

第2章 第59回国際学生会議

概要	6
総合テーマ	9
日程	10
プログラム全体の流れ	11
参加者名簿.....	12
スタッフ名簿	14
事後報告会について	16
メディアについて	17

第3章 事前研修旅行

事前研修旅行総括	19
各支部研修旅行報告	20

第4章 本会議

分科会総括.....	31
各分科会報告	32
総務総括	78
各プログラム報告	79

第5章 参加者感想

ISC59 の感想.....	85
----------------	----

第1章 国際学生会議

実行委員長挨拶

開催目的

国際学生会議の沿革

実行委員長挨拶

拝啓 時下益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

この度、2013年8月22日から9月2日の12日間にかけて、第59回国際学生会議を開催いたしました。開催にあたりましては多くの財団様、後援団体様、そして個人の方からも多大なるご協力をいただき、大変感謝しております。多くの方にご指導ご鞭撻いただき、本会議を開催することができました。

本年度は、総合テーマとして「ボーダレス社会と理解の壁—世界市民として考えること—」を掲げました。8ヵ国から参加した55名の学生は、それぞれが「理解の壁」を実感したことと思います。それは、30時間にも及ぶ熱い議論の中で耳にした、外国人学生のにわかには同意しがたい主張であったり、寝食を共にした共同生活の中で目にした、些細な習慣の違いであったりするでしょう。学生たちは、それら「理解の壁」を解消せんと、深い話し合いに徹しました。その末に、1つにまとまりあがった社会問題への考えを、成果発表会にて社会に発信しました。そうして、第59回国際学生会議は、多文化との相互理解を達成できたものと考えております。

この短くも濃密な12日間が、世界の学生たちの絆を深め、未来を築きあげる一助となることを強く願っています。

敬具

2013年9月吉日

第59回国際学生会議実行委員長

和田将彦

開催目的

新しい時代を築いていくのは、我々若者の役目である。ますます混迷の度を深める国際情勢の中、若者の可能性こそが未来の希望への萌芽であり、我々はそれを自分自身で育てゆかねばならない。国際学生会議（略称：ISC）は、そのような自覚の上に、我々が学生として出来ることは何か、との思いを集結し、具体化したものである。1954年の第1回の開催以来現在に至るまで、たゆむことなく毎年開催されてきた本会議の活動は、学生による国際交流の先駆的役割を果たすと共に、数多くの優秀な人材を育ててきたものと自負するものである。ISCで見聞きしたこと、体感したことは、参加者各人の血肉となり、そこで培う友情は、我々の勇気を奮い起こす力の源となる。ISCの開催が世界をすぐに変革するわけではない。しかし、変わるものがある。それは、参加者一人一人の内面の世界である。そして、一人一人が変わるならば、世界を変革することも可能なのである。

ISCの目的は、参加者一人一人が、他者との対話・交流を通して人の多様性を認識することである。それは、世界の抱える諸問題を自分自身の問題として捉え、問題意識を各国の若者と共有し、問題解決に向けて学生として行える可能性を共に追求することを可能にする。我々は、この地道な活動の結晶を社会に提言することで、世界平和に貢献出来れば幸いであると考えている。

国際学生会議の沿革

国際学生会議の母体は、1934年に始められた日米学生会議にある。日米開戦前夜両国の関係の悪化を憂える学生有志が奔走し、「世界の平和は太平洋の平和、太平洋の平和は日米間にあり、然してこの現実には若き日米学生の間においての率直な意見の交換、及び、相互理解の信頼を促進しなければならない」という提唱文の下に、第1回日米学生会議が青山学院大学において行われた。会議は1940年まで続けられたが、1941年の日米開戦により中断の憂き目を見ることとなる。

戦後、日本の新しい胎動の中で、1947年に戦争の反省を踏まえ、「各国の親善と正しい理解こそが国際平和達成への唯一の道である」という認識の下、第8回日米学生会議が日本で開催された。その後、1954年にアメリカで行われた第15回会議を最後に日米学生会議は解消され、国際学生会議へとその流れは継承された。日米学生会議は、1964年にOBの手により再結成され現在も行われている。

第1回国際学生会議は、1954年に12カ国から84名の外国人の参加を得て、28日間にわたり東京、関西、北海道、仙台で行われた。以後国際学生会議は、国際政治、経済、社会、文化などの多方面からの活発な討論と研修旅行を行って発展していくが、その時々の世界情勢とともに多くの屈折を経ている。1962年の第9回国際学生会議では、従来の本会議、研修旅行に加えて、団体代表者会議が新しく設けられ、会議をより有効なものにするために、決議をもって団体間の具体的協力活動を提起した。それによって、以後の会議の充実と参加団体間のより強い結束を目指した。

1968年には、学生運動のなかで日本国際学生協会の中央委員会が分裂し、翌年の国際学生会議は行われなかったが、1970年には会議が再開された。第32回においては、日本人参加者選抜制度を廃止し、国際学生協会員への国際交流の場を広げた。また、第37回では、帯広市とのタイアップにより、市民の方と国際交流の体験を共にした。そして第43回には参加国が計16カ国に上がる成果をあげることができた。第45回においては、多岐にわたる分野から専門家をお呼びして、議論する機会を設けることで社会との関連をさらに深めた。以上のような経緯を経て2013年、第59回国際学生会議を開催した。

第2章 第59回国際学生会議

概要

総合テーマ

日程

プログラム全体の流れ

参加者名簿

スタッフ名簿

事後報告会について

メディアについて

概要

会期・場所	<ul style="list-style-type: none">・事前研修旅行 8月22日～25日 (京都、大阪、神戸、岡山、九州の各地で開催)・本会議 8月26日～9月2日 (京都府立ゼミナールハウス、新大阪ユースホステル)
総合テーマ	「ボーダレス社会と理解の壁—世界市民として考えること—」
分科会テーマ	<ul style="list-style-type: none">・児童労働の再考 —未来を担う子供達のために—・21世紀の食糧安全保障 —アフリカにおける食糧難を解決するには—・いじめと自立支援 —今私達にできること—・途上国におけるジェンダー格差を考える —すべての人々が生きやすい社会を目指して—・高齢化社会を考える —生涯現役で過ごすために—
ねらい	様々な価値観、考えを認めあうことで真の相互理解を達成する。 各国を代表する学生がISCのプログラムを通して学び成長する。 開催国である日本の素晴らしさを体験し、世界へ発信する。
公用語	英語
参加者	日本人学生 37名 (内、実行委員 16名) 外国人学生 18名
参加費	日本人学生 5万5千円 外国人学生 2万5千円
内容	分科会における問題提起、議論 成果発表会 (サマリー発表) 日本文化体験/各国文化紹介/各種交流会

ISC59 参加大学

東京大学、一橋大学、上智大学、明治大学、立教大学、青山学院大学、東京外国語大学、首都大学東京、獨協大学、創価大学、京都大学、大阪大学、関西学院大学、同志社大学、同志社女子大学、立命館大学、大阪経済大学、神戸女学院大学、甲南大学、広島市立大学 (計 20 大学)

ISC59 参加国・地域

イスラエル、インドネシア、オーストラリア、韓国、ドイツ、日本、フィリピン、ベトナム (計 8 ヶ国)

主 催 日本国際学生協会
(I. S. A. : The International Student Association of Japan)

助 成 国際教育振興会賛助会
双日国際交流財団
平和中島財団
三菱 UFJ 国際財団

協 賛 日本国際学生協会 OB/OG
大野 洋平 氏
吉田 京平 氏

後 援 外務省
京都府
国際教育振興会
経済人ユー円卓会議日本委員会
京都府国際センター
大阪国際交流センター

総合テーマ

「ボーダレス社会と理解の壁—世界市民として考えること—」

近年の交通や通信手段における飛躍的な技術革新によって、国境を越えた人やモノ、カネ、情報の移動が益々盛んになっている。日本でも諸要因から産業の空洞化が進み、企業のグローバル化は顕著である。ボーダレス化が進んだ世界、社会は、一見すると壁の取り払われた理想郷のように映るが、依然として世界には解決されるべき問題が山積している。絶えることのない戦争や紛争、南北格差、環境問題、領土問題など枚挙に暇がない。それらの要因の1つとして考えられるのは、「理解の壁」とも言うべき精神面において相互理解を妨げる何かである。それは、相手への知識不足や、関心の欠落であるかもしれない。それが理解できれば、私たちは相互理解への一步を踏み出すことができる。

多国間交流を実現する国際学生会議では、議論や共同生活の中で多様なバックグラウンドを持つ相手との違いに気づき、曖昧ながらも「理解の壁」の根源を認識する場となるだろう。ボーダレス社会においては、それを認識した上で個々が世界市民としての自覚を持ち、世界の問題を自分の問題として捉えることが不可欠である。このような問題意識から総合テーマを設定した。

第59回国際学生会議は、話し合い、分かり合うという段階にとどまることなく、それらの経験に基づき行動を起こす意志を生み出したい。参加者が会議を通じて得たものを活かし、更なる経験を積んで成長し、技術や知識を身につけ、行動していくことで、周囲の人へ少しずつ思いは伝搬する。その繰り返しがいつの日か「理解の壁」を打ち砕くことを切に願う。

日程

事前研修旅行		
8月22日(木) 8月23日(金) 8月24日(土) 8月25日(日)	京都・大阪・神戸・岡山・九州 各地にて開催	
本会議		
8月26日(月)	開会式 基調講演・分科会1 ウェルカムパーティー	京都府立ゼミナールハウス
8月27日(火)	分科会2・分科会3 各国文化紹介	
8月28日(水)	日本文化体験 分科会4・分科会5	
8月29日(木)	分科会6・分科会7 カフェトーク	
8月30日(金)	本会議研修旅行 (施設移動)	
8月31日(土)	分科会8 分科会9・分科会10	新大阪ユースホステル
9月1日(日)	成果発表会 閉会式 フェアウェルパーティー	
9月2日(月)	解散	

プログラム全体の流れ

2012年

11月 第59回国際学生会議実行委員会発足

2013年

4月・5月 説明会

参加者募集のため、関東・関西両地域で大学施設や公的施設を使用して、説明会を実施しました。インターネットでの広報に加え、実行委員と参加者が顔を合わせる説明会を行ったことで説明会参加者に国際学生会議の雰囲気伝えることができました。

5月末 選考

参加者の選考を参加申込書、次段階として面接で行いました。参加申込書では希望のテーブルテーマを選んだ理由やその時点での考えを問い、面接では実際に話すことで伝わってくるモチベーションやコミュニケーション能力、強みや弱みといった、テーブルでディスカッションを行うにあたり重要となる要素を確認しました。また、面接の中で英語力に関しての確認を行うことで会議自体の英語のレベルを保つことにも注力しました。

6月23日 参加者招集会

日本人参加者で顔合わせを行い、各テーブルではディスカッションを行いました。目的としては全体での交流を図り、本会議を円滑に進めるためのリレーション構築を行うこと、及び本会議でのディスカッションに備えての英語力の把握と興味範囲の確認、そしてディスカッションに慣れることであり、それらを達成することができました。

7月・8月 各テーブルでの事前勉強会

本会議前に2回の勉強会を日本人参加者で実施しました。どのテーブルも事前課題を出すことで効率的に勉強会を進め、議論のための知識を定着させることができました。また、日本人が不得意とする英語での専門用語の確認や、英語でのディスカッション練習を行ったことで、本会議中のディスカッションを円滑に進めることができました。あくまで日本で実施するものであり外国人参加者は参加できませんが、同様に課題を

出しインターネット上で共有する、あるいは、日本での事前勉強会の結果を本会議までに共有し意見を出し合うといったことをオンラインで行うことで、意識面・知識面で乖離が起きないように配慮しました。

8月22日～同月25日 事前研修旅行(19頁に詳細を記載)

8月26日～9月2日 本会議(31頁以降に詳細を記載)

※9月1日 成果発表会(サマリー発表)

9月21日 一般報告会(16頁に詳細を記載)

10月5、6日 主催団体報告会(16頁に詳細を記載)

参加者名簿

Table 1 児童労働の再考 —未来を担う子供達のために—

亀本知可子	広島市立大学	Japanese
津田良恵	創価大学	Japanese
波多野未佳	明治大学	Japanese
春田佳恵	立教大学	Japanese
Agustin, Jr. Palmares	University of St. La Salle	Filipino
Charlotte Bezan	Murdoch University	Australian
Franziska Burkert	Copenhagen Business School	German
Kieu Huynh Thi Thu	Vietnam National University	Vietnamese

Table 2 21世紀の食糧安全保障 —アフリカにおける食糧難を解決するには—

井上浩樹	京都大学	Japanese
江尻優貴	関西学院大学	Japanese
河野咲子	東京大学	Japanese
長尾果歩	立命館大学	Japanese
吉田健一	一橋大学	Japanese
Muhammad Aufa Ahdan	University of Indonesia	Indonesian
Linda Mae Belonio	University of St. La Salle	Filipino
Aimee Lynn Binayug	University of St. La Salle	Filipino
Mary Ann Achurra	University of St. La Salle	Filipino

Table 3 いじめと自立支援 —今私達にできること—

岡田潮音	同志社女子大学	Japanese
銭谷成剛	大阪大学	Japanese
吉田友実	獨協大学	Japanese
Geralyn Ofamen	University of St. La Salle	Filipino
Seul-Gi Ku	Chosun university	Korean
Irit Zicker	Bar Ilan University	Israeli
Thu Lam	University of Social Sciences and Humanities	Vietnamese

Table 4 途上国におけるジェンダー格差を考える
—すべての人々が生きやすい社会を目指して—

植村詩織	青山学院大学	Japanese
齋木遥香	関西学院大学	Japanese
中嶋祥起	大阪経済大学	Japanese
吉貝昌紘	京都大学	Japanese
山口絵理子	東京大学	Japanese
Ken Rose Panaligan	University St. La Salle	Filipino
Ilman Dzikri	University of Indonesia	Indonesian
Thanh Dam	University of Pedagogy and University of Social Sciences and Humanities	Vietnamese

Table 5 高齢化社会を考える —生涯現役で過ごすために—

佐久山裕之	同志社大学	Japanese
柳原由真	上智大学	Japanese
安田洋介	東京大学	Japanese
伊藤賢次郎	首都大学東京	Japanese
Van Nguyen	University of Social Sciences and Humanities	Vietnamese
John Joseph Jarloyan	University of St. La Salle	Filipino
Ma. Alyssa Bernadette Villacorsa	University of St. La Salle	Filipino

スタッフ名簿

第 59 回国際学生会議実行委員会

実行委員長	和田将彦	関西学院大学 3 年
総務 部長	伊藤優衣	神戸女学院大学 3 年
スタッフ	山永航太	立教大学 2 年
広報 部長	尾崎仁美	関西学院大学 3 年
スタッフ	櫻井理菜	立教大学 2 年
財務 部長	奥村高大	同志社大学 3 年
スタッフ	吉屋美奈	立教大学 2 年
国際渉外部長	津村真衣	神戸女学院大学 3 年
スタッフ	西村一帆	同志社女子大学 2 年
テーブルチーフ		
部長	上田瞭	関西学院大 3 学年
スタッフ	眞鍋優	立教大学 3 年
	澤本篤志	立教大学 2 年
	李禎み	東京大学 2 年
	平間美冴	東京外国語大学 2 年
研修旅行(ST)部長	東口未保	関西学院大学 2 年
撮影係	土内茜	甲南大学 2 年

各支部研修旅行実行委員長

京都支部	三谷優佳	同志社女子大学 3 年
大阪支部	岩倉由來	関西大学 2 年
神戸支部	山本葉月	関西学院大学 2 年
岡山支部	谷口未紗	ノートルダム清心女子大学 2 年
九州支部	竹本早希子	北九州市立大学 2 年

日本国際学生協会 中央役員

会長	鳥山昂史	神戸大学 3年
中央事務局長	中雄佑	神戸大学 3年
財務部長	田中勇人	同志社大学 3年
広報部長	西村晃介	岡山大学 3年
IW 部長	藤田ちづる	甲南大学 3年
Ex. 部長	麓磨紀子	北九州市立大学 3年

各支部支部長

東京支部長	岩渕将之	立教大学 2年
京都支部長	上野元大	同志社大学 2年
大阪支部長	森井圭一郎	関西大学 2年
神戸支部長	大川裕生	関西学院大学 2年
岡山支部長	石村祥	岡山大学 3年
九州支部長	二谷美沙	北九州市立大学 2年

事後報告会について

一般報告会

2013年9月21日、国立オリンピック記念青少年総合センターにて、一般向けの報告会を行いました。開催目的としましては、本会議開催地ではなかった関東の学生にも国際学生会議の魅力伝え、さらに第60回国際学生会議の実行委員を募ることでした。内容は、成果発表会で行ったプレゼンテーションの再現、またISC59参加者を招いたパネルディスカッションを行いました。オーディエンスの反応も良く、非常に意味のある報告会となりました。



主催団体報告会

2013年10月5日に主催団体である日本国際学生協会の全国合宿において、第59回国際学生会議報告会を行いました。国際学生会議の概要や実際の様子を、写真を含んだプレゼンテーション及び映像で報告しました。第59回の概要を雰囲気と共に語ることで、多くの会員が国際学生会議の魅力を理解し、興味を持ったことと考えます。報告会後には、今回第59回国際学生会議ではどのような議論が行われたのかという質問や、次回に参加者としてないし運営側として関わりたいという意見が出るなど、次回の第60回国際学生会議にも繋がる報告会となりました。



メディアについて

グローバルコミュニティー（留学生と国際派日本人のための国際交流新聞）の宮崎様より成果発表会の取材を受け、Vol. 49（2013年10・11月号）に記事が掲載されました。

高齢化社会の問題をアジアの学生と考える

第59回国際学生会議の成果発表会



国際学生会議

(ISC: International Student Conference の略称)

1954年に発足、今年で59回目を迎える、日本国際学生協会 (ISA) が主催する学生会議で、世界各国の学生が5つのテーブルテーマについて、グループのメンバーを変えずに約一週間泊まり込みで議論を重ね、成果を英語で発信するというものだ。色々な国の学生も集まるので、ウェルカムパーティー

や研修旅行、各国文化紹介、日本文化体験など、親睦を深めるプログラムも充実しているのが特徴。

実行委員長の和田利彦さん（関西学院大学3年）に誘われ、9月1日、大阪市で開かれた、第59回国際学生会議の成果発表会に行ってきた。途上国での児童労働、食料難の解消、ジェンダー問題、また、日本のいじめや高齢化社会への対応などについて、世界各国の学生が1週間の泊まり込みで熱い議論を交わした。その中でも、今回は、「高齢化社会を考える」というトピックで話し合った学生たちにお話を聞いた。

まず、どうしてこの話題を選んだのか聞いてみた。



日本人学生

*最近身内がなくなり、高齢化について考えて見なくなりました。

*フィリピンやベトナムは孤独死などの問題はないがどのように対応しているのかわかり、解決策を探りたかった。

*アジアの国々では、地域社会での人のつながりが、身寄りのない高齢者をサポートしているという。その点を学びたかった。

海外の学生

*自分の国、フィリピンでは日本のような孤独死はなく、家族が祖父母を面倒見るのが当たり前になっている。家族の大切さを話したかった。

*ベトナムでも、介護などは、家族の問題で、老人が一人で住むこともない。日本を知る上でも、この問題を日本人の若者と一緒に考えてみたかった。

上記の様に高齢化社会の問題の中でも、特に「孤独死」への問題意識は、皆一様に強く感じているようだった。リーダーの平岡美芽さん（東京外国語大学2年 写真左下）は、流暢な英語でみんなの意見をまとめてくれたが、この問題は、学生にはかなり難問だ。家族のあり方、地域社会への貢献など、関心はあっても、独身でしかも学生の身分で、どうしよう答えを出していいか、フィリピンやベトナムの学生の話にもヒントを得ながら、少しずつ解決の糸口探しているようだった。

学生さんたちの議論の中でも、いくつになっても人生を楽しむ欧米の高齢者や、親族縁者や地域社会が力を合わせて高齢者の面倒を見るフィリピンやベトナムのいいところを参考にしようという意見もあった。医療技術が進み、人間の寿命が伸びるとこの問題は、世界中に波及して行く。しかし、議論がされている割には、大人の社会の中でも、具体的な解決策が提示されているとはいえないだろう。

その状況で、学生さんたちが、あえてこのような問題を議論しようと試みたことは大変意義のあることだと思う。

大切なことは、彼らが家族の大切さや地域コミュニティーの重要性を再認識し、自分たちが高齢者になった時は、人に頼るのではなく、生涯現役で人生を楽しもう気持ちに切り替えることである。そうすれば、時間と共にこの問題も解決していくかもしれない。

何歳になっても、社会参加ができる環境を作っていくことが重要だ。そのためにも、彼らの様な問題意識の高い学生さんが一人でも増えることを願っている。

第 3 章 事前研修旅行

事前研修旅行総括

各支部事前研修旅行報告

事前研修旅行総括

ST 部長 東口未保

1. 事前研修旅行概要

母団体である日本国際学生協会（以下 I. S. A.）のプログラムの一つである国際学生会議（以下 ISC）に参加する外国人参加者を I. S. A. の各支部（京都、大阪、神戸、岡山、九州）に派遣し、I. S. A. 会員からの事前研修旅行参加者とともに観光や文化交流を行います。これは各支部の実行委員が企画し、ISC 本会議前に行うものです。今年は 8 月 22 日～25 日に行いました。目的としましては、本会議前に日本文化を外国人参加者に慣れてもらうことと、日本人参加者が彼らと交流できる機会を設けることです。

2. 事前研修旅行意義

事前研修旅行の意義で最も重要なことは、国際学生会議に参加する外国人の方々が本会議前に事前研修旅行を通して日本の文化・習慣に触れ、日本に慣れてから本会議に臨んでもらうことです。

また企画から参加まで、すべて『学生』が主体となって動くこの事前研修旅行には『学生』ならではの発想と視点から企画された様々なプランがあります。

3. 総括

今年は総勢 320 名もの方々に参加していただくことができました。年々参加者が増加しているこの事前研修旅行、今年も無事開催できたことを心から嬉しく思います。私が掲げていた今年の事前研修旅行全体テーマは「この『初めて』がチャレンジの『始まり』に」です。ここでいう『初めて』とは人によってそれぞれ違います。事前研修旅行で体験した『初めて』がただ「楽しかった」だけで終わるのではなく、次の何かにつながるきっかけになってほしいという思いからこのテーマを設定しました。参加者の皆様にとって事前研修旅行の参加が、今後の各々の活動に何かしら意味をもたらすものになっていれば事前研修旅行を統括した者として喜ばしい限りです。

最後に、この事前研修旅行を企画するにあたって協力して下さったすべての方、そして参加して下さったすべての方々に心から感謝致します。この事前研修旅行がこれからもたくさんの人に愛され、無事開催されることを心から願います。本当にありがとうございました。

各支部事前研修旅行報告

京都支部 総括

実行委員長 三谷優佳

私は約半年間、「新しい自分に出会う」をテーマに17人の素晴らしい実行委員たちと事前研修旅行を作り上げてきました。事前研修旅行の中では、いくつもの「新しい自分との出会い」の場面に立ち会うことができ、実行委員だけでなく、参加者にとっても実りある京都事前研修旅行を開催することができました。参加者、全ての実行委員に事前研修旅行を通して「新しい自分に出会う」体験をしてほしいという願いから設定したこのスローガンですが、結果としては、参加者、実行委員そして私自身も「新しい自分に出会う」経験をすることができました。

私は、これまで実行委員長のような人の上に立つ大役などはしたことがなく、実行委員長をするにあたっては、不安が胸を過ってばかりでした。準備段階では、何度も自らの能力の乏しさや情けなさからくる苛立ちと衝突し、何度もリーダーという立場の難しさについて悩みましたが、失敗から自分が考えるリーダー像に近づこうと努力し、17人の事前研修旅行実行委員を引っ張っていくことができました。

事前研修旅行本番では、4人の外国人学生と全日30名以上の参加者を迎え、京都の観光地や文化体験を通し、京都特有のはんなりとした雰囲気を感じてもらうことができました。各日の実行委員は夏の猛暑の中、しっかりと実行委員としての意識を持ち、参加者の誘導や企画の段取りをされていて、これまで見たことがないほどの真剣な表情に実行委員の成長や新たな一面を感じることができました。また、参加者からも自身の成長に関するたくさんのエピソードを伺うことができました。英語はあまり得意ではないけれど、外国人学生とジェスチャーを用いて笑顔で触れ合うことで、仲良くなることができたという声や、外国人学生と触れ合い、相手の国の文化を垣間見みることで、その国に興味を持つことができたという声、事前研修旅行で自身の英語の拙さに気が付いたため、これから英語を勉強していきたいという声。これらの「新しく考えた事」「新しく発見したこと」「新しく気づいた事」は今後の自身の人生に少なからず良い影響を与えてくれる「新しい自分」を築いていく一歩となります。その一歩をこの京都事前研修旅行で踏み出してもらえたということを実際に嬉しく、誇りに感じています。最後に、事前研修旅行の運営に全力で力を注いでくれた全ての実行委員と事前研修旅行に参加して下さった方々、事前研修旅行に携わって下さった方々に深くお礼申し上げます。

京都事前研修旅行参加者の声

成松真優

私は事前研修旅行の2日目と最終日に参加しました。事前研修旅行は私に、ただ楽しいだけではなく、たくさんの刺激を与えてくれました。ISC参加者の方やI.S.A.の先輩方が英語を話す姿をみて、私も先輩方のように英語を話せるように努力をしようと強く思いました。事前研修旅行に参加しなかったら、それ以前に、I.S.A.に入らなかったら、このような思いは強くなかなかたろうし、願望で終わっていたと思います。事前研修旅行に参加したことで、自分の気持ちにも変化を与えることができ、夏休みの楽しい思い出にもなりました。そして、自分の中できっかけを作ろうと思って挑戦したことが事前研修旅行期間中の外国人参加者のホストをしたことです。私が担当したのはフィリピン人の女の子でした。最初はどうしたらよいのかもわからず、何がなんだかわからない状態でした。失敗だなと思うことは朝食にシリアルを出してしまったことです。初めての朝、シリアルを出した時にあまり食べてくれなかったのも、口に合わなかったのか、慣れない環境で食欲がないだけなのか、不安しかありませんでした。その後、同じフィリピンの女の子のホストをした先輩から、フィリピンでシリアルは子どもの食べ物らしい、という話を聞いて、勉強不足だったなと思いました。私の英語の発音が悪くて、伝わらなかったこともありました。そういったときには、たくさんのことを説明するときは紙に書いて話したり、話している途中に通じなかったら翻訳機や辞書を使ったり、はじめてのことがいっぱいでした。あまり英語を話せない私に彼女は本当に親切にしてくれました。私がお風呂に入っている間に食器を洗ってくれ、私がアルバイトで参加しなかった3日目は、私が疲れているからといって夜ご飯を作ってくれました。事前研修旅行中だけでなく、家に帰ってからもしろいろな話をし、どの国でも女の子は同じだと思いました。自分の家で日本語を話すことができなくて、気疲れもしたけれど親切で心の優しい彼女のホストをすることができて、本当によかったです。この事前研修旅行でのホストが初めての本格的な国際交流であった私にとって、この4日間で経験したことは忘れられません。事前研修旅行の前は不安しかなかったけれど、やってよかったと本当に思うことができました。

【日程】

- 8月22日 日本文化紹介・四条散策・ウェルカムパーティー
- 8月23日 伏見稲荷大社・八つ橋作り体験・京都駅散策
- 8月24日 平安神宮・東山動物園・京都市文化博物館
- 8月25日 手巻き寿司作り・フェアウェルパーティー

大阪支部 総括

実行委員長 岩倉由來

今年度の大阪支部の事前研修旅行にはベトナム人2人とフィリピン人1人の計3人の方が参加してくださいました。3人とも明るく友好的な性格でしたので、日本人参加者ともすぐに仲良くなれていて「とても楽しい4日間をありがとう。」と言ってもらえた時はしんどいことも多かったけれど、やってよかったと思いました。

私が実行委員長をやるにつれて学んだことは、積極的に行動することです。まず、事前研修旅行を作るうえでのスタッフの募集も個人的に連絡したり、企画を考える時も、案を何個も何個も出すと次第にみんなも意見を言ってくれて、これがみんなを引っ張っていくと言うことなのかなと思いました。

今思えば当たり前のことだと思いますが、やり方にとっても戸惑っていたので、そのことに気付いたときはすごく視野が広がった感覚でした。

でもやはり一番学んだことは、ひとりで生きていけないし、自分ひとりではなんにもできないということです。企画する上でも、自分ひとりのアイデアでは限界があるし、みんなで意見を出し合ったからこそ、外国人の方に喜んでもらえるような企画を考えることができたし、当日も参加者の方々が私たちに協力してくれたので事前研修旅行が成功できたと感じたからです。今まで企画は企画者がしっかりしているかどうかで成功するかどうかが決まっていたので今回のことで考え方が変わりました。実行委員長をして私はとてもいい経験ができたと思っています。積極的になること、人の話をよく聞くこと、企画はみんなで作りに上げていくこと、その場を盛り上げるときの難しさ、私が今まで気づいていなかったことにたくさん気づくことができました。この経験を今後の活動にも役立てていきたいです。最後になりましたが、このような機会を与えてくださった支援者の皆様、外国人参加者、実行委員に深く感謝し、この歴史ある活動が末永く続くことと、武器を捨て、話し合い、思いやる平和な世界に貢献することを願っています。

大阪事前研修旅行参加者の声

森井圭一郎

去年に引き続いて二回目の参加となりました。去年の事前研修旅行ではホストを経験し私自身そのことが大きなターニングポイントとなったため今年はそのような体験を後輩にしてほしいという思いで臨みました。外国人を家に泊めるという経験はすべての人が日常でできることではなくある意味、非日常的体験であり、それは泊めた人にしか分からないと思っています。

さて今年事前研修旅行では3名の外国人を招き観光を共にしました。やはり彼らにとっては見るものすべてが新しい体験、好奇心がそそられているのをもものすごく感じ取れました。僕ら日本人はただの参加者で満足するのではなく彼らに日本の良さを伝える使命を担っており、私自身一番意識したのはその点です。日本を観光案内することで国際交流できるだけでなく、日本人にとっても自国をより深く理解できる機会となるのです。

ただ、常日頃問題として思っていることは日本人の英語力、この世界に進出せざるを得ないこの状況においても世界の基準に追いついていないこの現状は情けなくも感じました。ただ、私が海外を好きな理由としても存在するように外国人は本当に気さくで、積極的にコミュニケーションをとってくれるために、本当に実りある日々だったと振り返っています。

今後この事前研修旅行の改善できる点として私が感じたことは2つあり、1つ目は体験型のプランを練っていくこと。幸い関西は京都をはじめとして日本らしさが強く感じられる地域であり本当に恵まれているため、このことをもっと活用すれば全員が楽しめるのではないかと感じました。

2つ目は外国人参加者の数、日本人の会員が600といるこの団体で十分な交流をするのであればまだまだ十分な人数ではないと痛感しました。この事前研修旅行は誇れるものであると断言できるため、まずは知名度を高めていく、留学生をまきこんでいくなど恩を受けた自分なりの方法でこの企画をもっとより良いものにしたいと考えています。

最後になりますが、この事前研修旅行に関わってくださった外国人参加者、実行委員、そして私たち学生に機会を与えてくださった支援者の皆様に深く感謝申し上げます。この歴史ある活動が世界の平和に貢献することを願って。

【日程】

- 8月22日 ウェルカムパーティー・大阪歴史博物館、大阪城
- 8月23日 友禅染体験、抹茶体験
- 8月24日 天保山大観覧車、大阪くらしの今昔館、上方浮世絵館
- 8月25日 日本橋散策、串カツ、お化け屋敷、通天閣

神戸支部 総括

実行委員長 山本葉月

今年度の神戸事前研修旅行には、フィリピンから2名・ベトナムから1名・ドイツから1名の外国人参加者に加え、韓国から1名・中国から1名・アメリカから1名の留学生が参加してくださいました。今年はvisaの問題もなく、無事4名全員の外国人の方が参加でき、また新たな試みとして非I.S.A.会員である留学生を招き、国際色豊かな事前研修旅行となりました。また、他支部からも多くの方にお越しいただき、16大学が一斉に集まることでより多くの価値観を共有できる場となりました。

私が掲げていたテーマとして『あなたを変えるST(事前研修旅行)』がありましたが、まさに参加者はもちろん、実行委員にとっても色濃く思い出に残る充実した4日間でした。

事前研修旅行は、日本人参加者にとってI.S.A.で最も参加しやすい国内プログラムであることから、特に一回生にとって今後の活動に躍進するべく、多くのことを感じ・学び・楽しむ機会となることを目標としていました。結果的に、多くの笑顔と笑い声にあふれ、壁のない自然な交流を通し、今後のI.S.A.のみならず、その他の場においても活動していくうえで、何かバネとなるようなものを見つけて頂けたのではないかと思います。

また、3日目4日目は台風の影響で大雨洪水警報が出るなどの緊急事態にも迅速かつ臨機応変に対応することができ、この日のために幾度となく話し合いを繰り返し培われた、実行委員の「行動力」が開花しました。

私は去年の実行委員をしていた経験から、今年の間にも事前研修旅行を企画運営していくうえで何か『自分の革命』を起こしてほしいと考えておりました。そして、私の想いは届き、各々半年前とは比べものにならないほど成長し、一回り大きくなったように見受けました。

私自身、この半年間で去年より多くのことを学びました。組織をマネジメントしていくことの難しさや、人との関わりの大切さ、自分の弱点と向き合い乗り越えていくことの達成感など、事前研修旅行の枠を超え、人生の糧となるようなとても貴重な経験をさせていただきました。

また、ホストや実行委員にとっても初めての「国際交流」がありました。特別に英語力に長けていなくとも、外国人の方と親密な交流を通し「友達」になることができました。初めこそお互い距離があったものの、最終日には涙を流して別れを惜しむ後輩の姿を見て、国際交流とは定義し難いものの、単純にこういった「心と心の繋がり」ができる瞬間のことを指すのではないかと思います。

最後に、事前研修旅行を支えてくださったすべての方に感謝して、今後も事前研修旅行が愛され、貴重な体験を提供できるプログラムとなることを願います。本当にありがとうございました。

神戸事前研修旅行参加者の声

吉崎夕貴

事前研修旅行への参加は今年度が初めてで、同時に I. S. A. に入会して初めてのプログラムでもありました。私は「国際交流」に興味がありこの団体に入会したものの、「英語」に対する抵抗感が払拭できず、ホストを依頼されるまでずっと目を背けてきました。ホストを引き受けた時もやはり不安で、「やはり自分には勤まらないのではないかと時に断念しそうになった時もありました。しかしいざ覚悟を決めて4日間臨んでみると、外国人参加者だけでなく他支部をはじめ沢山の会員の方と楽しく交流することができ、一日一日が笑顔で満ち溢れ、本当に充実した日々を過ごすことが出来ました。

私はこの4日間で国内・国外共に多くの友達ができ、そのことは勿論嬉しかったのですが、それ以上に拙い英語力でも「国際交流」ができるということを実感できたことが何よりも嬉しかったですし、これはこの4日間で一番大きな収穫だったと思います。そして今後ともさらに「国際交流」を満喫できるように「英語」と向き合う決心をする機会となりました。この事前研修旅行で得たことはきっと今後の私にとって大きな糧となるでしょう。

最後に、半年以上の歳月をかけて事前研修旅行を準備し、私たち会員に貴重な体験を提供してくださったことに心から感謝しております。非常に間接的ではありますが、この4日間で得た貴重な体験を新入会員中心に伝え、今後より多くの会員が事前研修旅行に参加したいと感じてもらえるよう、会員の一人として何らかのサポートができればなと思っています。本当にありがとうございました。

【日程】

- 8月22日 明石 BBQ・海企画（大蔵海岸）・温泉
- 8月23日 神戸 文化体験・風船ゲーム・コスプレ喫茶（キャラ手巻き寿司）・お面づくり・盆踊り・合唱
- 8月24日 姫路 書写山にてミッションゲームと写経体験・姫路城
- 8月25日 神戸 ミッションゲーム・クルージング・フェアウェルパーティー

岡山支部 総括

実行委員長 谷口未紗

今年度の岡山事前研修旅行には、フィリピンから2名・ベトナムから1名・インドネシアから1名の計4名の外国人が参加してくださいました。外国人参加者が4名ということで、昨年度に比べ、事前研修旅行の醍醐味である、日本人参加者と外国人参加者との交流を深める機会を多く設けることができたと思います。また、外国人参加者が明るく積極的で、常に笑顔でいてくださったので、打ち解けるのに時間はかかりませんでした。

今年度の岡山事前研修旅行は「ふたつぶあげよう!笑顔と勇気のきびだんご!! ~自分たちが笑顔でいることによって、参加者の笑顔を引き出し、積極的に関わる勇気を持つきっかけと雰囲気を提供する~」というテーマのもと、また今年度の事前研修旅行の全体テーマのキーワードでもある“初めて”に挑戦すべく、“直島”と“吉備”と初めての開催地を選択しました。初めての開催地とあり、不安要素は多々ありました。しかし、実行委員で話し合いを重ねていくうちにその不安は徐々に取り除かれていき、次第に良い自信へと変わっていきました。

事前研修旅行当日は2日目の途中から天候に恵まれず雨の中での活動で、特に吉備では施設の時間に縛られていたため、自分たちの判断でスケジュール変更を行えず、急な変更にし少しあたふたしてしまった部分があり、この点に関しては来年度への課題であります。そして、参加者の皆さんには、急なスケジュール変更にも嫌な顔一つせず「いいよ。大丈夫。」と声をかけていただき、ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。参加者の皆さんのご協力なしには運営することはできませんでした。

私を含め、実行委員にとって事前研修旅行とは“成長”でありました。実行委員長を務めるにあたり、自分の思いをどのように実行委員全員に伝えていくべきか。そして実行委員みんなの思いをどのように形にしていけばいいのか。悩むことも多々ありましたが、そのひとつひとつが、私のこれからの人生の中できっと力になってくれる、そう思います。こうして事前研修旅行を無事に終えることができた今、ここまでやってきて本当によかったと感じます。

また、参加者の皆さんから「今年の事前研修旅行、楽しかったよ。」と言葉をいただき、外国人参加者からは「事前研修旅行は早すぎる。もっともっこのにいたい。岡山に住みたい。」と仰っていただき、そして、フェアウェルパーティーが終わった後に「明日(5日目)はどこに行くの?」と聞かれたときは言葉になりませんでした。こんなにも岡山事前研修旅行を楽しんでくださった。これ以上に実行委員長として幸せなことはありません。私自身至らない点ばかり

でしたが、この事前研修旅行で何か次への挑戦に繋がるものを得ていただけましたら幸いです。

最後になりますが、今まで半年間以上に渡り、事前研修旅行を運営してきた実行委員に感謝すると共に、私を支えてきてくださった多くの皆様に、そして、このような貴重な機会を与えてくださいましたことに心より御礼申し上げます。そして、この歴史ある活動がこれからさらに発展を遂げつつ受け継がれていくことを願っております。本当にありがとうございました。

岡山事前研修旅行参加者の声

田中葵

私は、岡山の事前研修旅行に4日間参加させていただきました。事前研修旅行に参加すること自体が初めてで、たくさん不安や心配なことがありましたが、さまざまな体験・他の支部の方々と交流ができ、楽しく過ごすことができました。私は岡山県出身でありながら倉敷美観地区、後樂園・岡山城・県立博物館には今まで一度も訪れたことがなかったので、このような機会に観光することができてとてもよい思い出を作ることができたのと同時に、私の知らない岡山を再発見することができました。また、外国人の方と4日間も一緒に行動をともにすることも私の人生初の経験でした。

今回の事前研修旅行で、私は、私自身の英語力の足りなさを痛感しました。私は英語への自信のなさから、外国人参加者の方々とほとんどコミュニケーションをとることができず、せっかくの貴重な機会の大半を無駄にしてしまいました。事前研修旅行を終えた今、このことをとても心残りに感じています。次回に事前研修旅行やプログラムに参加させていただく際には、今回よりもさらに積極的に外国人参加者の方と交流が図れるよう、足りない英語力をおぎなうこと、とにかく外国人参加者の方に「話しかけてみる」努力をしていきたいと感じました。

【日程】

- 8月22日 ウェルカムパーティー・家プロジェクトエリア・つつじ荘・宮浦港
- 8月23日 きびだんご作り・フォトオリエンテーリング・キャンプファイヤー
- 8月24日 大原美術館見学・ミッションゲーム
- 8月25日 スポーツ・ゲーム・後樂園、岡山城、県立博物館にてミッションゲーム・フェアウェルパーティー

九州支部 総括

実行委員長 竹本早希子

2013年の九州事前研修旅行での九州支部の目標は、参加者同士の「国、支部、学年をこえたつながり」をつくることでした。事前研修旅行を通して今まで関わることのなかった、国籍の異なる人、他支部の人、学年の違う先輩・後輩とのつながりを深めてほしいという思いをこめました。これは、この機会を生かして新しいつながりを作り、これからの活動に生かしてほしいという考えが実行委員全体の考えの根底にあったからです。

この目標を達成するため、コミュニケーションをとる機会が増えるようなプランを考え、グループ分けを工夫し、人と人を繋ぐことができるように様子を見て動きました。

実行委員長をするにあたって、楽しみな気持ちの反面、無事に事前研修旅行を終えることができるのかという不安な気持ちもありました。しかし、ST部長、ISC財務部、実行委員のみんな、参加者の方など、たくさんの人の協力のおかげで無事に事前研修旅行をおえることができました。特に実行委員に対してはより感謝の気持ちがいっぱいです。1日1日が終わるうちに実行委員全体の動きがよくなっていき、そのことに刺激を受け、自分の足りていないことに気付き向上心をもって4日間取り組むことができました。そしてなによりも、実行委員1人1人が楽しんで運営していたことが、疲れを忘れて楽しく運営することにつながりました。最後まで協力してくれた実行委員のみんなには感謝の気持ちでいっぱいです。また、至らない点が多くあった私を助けて協力してくださった皆さん本当にありがとうございました。

参加者の方々からは、帰り際に「ありがとう」「楽しかったよ」などの言葉をいただき、それを聞く限りは楽しんでいただけたのかなと思っています。実行委員が楽しみながら運営できたように参加者の方も楽しんで参加し、参加者も実行委員もこの事前研修旅行によって何か得たものがあると幸いです。私自身は、前よりも成長したとを感じる部分がたくさんあります。事前研修旅行に関わってくださったみなさんありがとうございました。

事前研修旅行の日本にいながら外国の方や他支部の方と交流できるという大きな魅力を生かし、来年もまた新しい目標をもって進めていってほしいです。来年は、今年の経験を繋げられるようサポートしていきたいです。来年も事前研修旅行が開催されることを願っています。

九州事前研修旅行参加者の声

佐藤万由子

今回、九州事前研修旅行では外国人参加者を迎えるホストとして参加しました。全4日の日程と前後を合わせた6日間を外国人参加者と生活し、多くの事を学ぶことができました。

私はこれまで学校の授業等以外で英語を話す機会がなく、英語が得意というわけではありませんでした。むしろ苦手でした。そんな私にとって今回の経験は大きな転機になったと思います。苦手だからと避けて通ってきた英語ですが、コミュニケーションの手段として必要不可欠なものだと改めて気付かされました。そして、自分がどれだけその技術を身につけていないかということを知られました。最初の2日間は本当に辞書に頼り切りだったり、考えてから話したりしていました。しかし、その後の4日間を通してなんとなく彼女たちの言いたいことがわかってきて、ジェスチャーも交えれば会話が成立するようになってきました。そのことが何より嬉しかったです。

4日間の経験でも多くを外国人参加者さんと過ごしましたが、内2日間のお泊りでは全日程の中でも特に有意義なものでした。この2日間は他支部から参加された方も多く、学年に縛られず他支部の参加者さんと仲良くなることができました。事前研修旅行が終わった今でも、連絡をとりあったりできているので、また何かの企画で会えたらと思います。悪天候のため、滝すべりが出来なくなったことは残念でしたが、1日目の竹細工や、花火、そして参加者みんなで楽しく夜を過ごしたこと、2日目のビール工場見学や、おいしいうどんなど、どの体験もととても楽しく、また外国人参加者と仲を深めることのできる良い体験でした。1日目の夜は彼女たちそれぞれの国の言葉について教えてもらったり、文化的なことについて話してもらったりしたこともよく覚えています。その他の日程での日本文化について触れてもらうプログラムも、自分たちが必死になったりして楽しく過ごすことができました。英語で話すという点を含め、学ぶ点も多くあり、非常に貴重な体験のできる4日間でした。

【日程】

- 8月22日 オープニングセレモニー・昼食・昔遊び
- 8月23日 昼食・竹細工体験・湯布院観光
- 8月24日 酒造見学・昼食・ビール工場見学・温泉・夕食
- 8月25日 宝探し・昼食・万華鏡作り

第4章 本会議

分科会総括

各分科会報告

総務総括

各プログラム報告

分科会総括

テーブルチーフ部長 上田瞭

本会議におきましては五つの分科会が無事終了し、成果発表会に至ることができました。参加者の皆様並びに分科会構成にご協力頂いた方々に心から感謝申し上げます。

さて、第59回学生会議は、「ボーダレス社会と理解の壁」という総合テーマのもと、「児童労働の再考」、「21世紀の食糧安全保障」、「いじめと自立支援」、「途上国におけるジェンダー格差を考える」、そして「高齢化社会を考える」と銘打たれた5つの分科会のいずれかに国内外からの各参加者が所属するという形式で開催されました。各分科会においては始めに到達目標が掲げられ、私達は協力しながら段階を経た議論を進めました。多様な文化背景及び価値観に基づいた数々の意見が飛び交う環境の中、私達は時に共感を覚え、時に差異を感じる事となりました。それでも、ある目標に向かって全員が一丸となり議論や作業を重ねる過程で、次第に「壁」は壊され確かな相互理解が芽生えていったのではないかと考えます。また、分科会で取り扱った諸問題が広く世界で議論されることの必要性を改めて認識することも重要でした。一見局所的に思える問題でも、その構図や原因を辿ることで、世界全体がその問題を引き起こしていることや、その問題が他の地域でも将来起こり得るということなどを理解できたことが具体的な成果と言えるでしょう。私達の世代が広く世界から集まり、今日の世界の中で各国がどれだけ密接に関わりあっているか、つまり進行するボーダレス化の現状を共に見つめたこの1週間は、将来の国際社会を担うための布石となると信じて疑いません。

以上のような各分科会の構成及び本会議中の進行は、決してテーブルチーフ一人の力だけでできるものではありませんでした。準備段階では基本的に個人単位の学習作業が続くのがテーブルチーフです。故に、第一歩となるテーマ選定から詳細な議論内容の決定に至るまでは数々の苦悩もありました。各テーブルチーフは、他のテーブルチーフは勿論、委員会全体のサポートを受けながらやっと本会議を迎えることができました。そして本会議中には、進行や議論スケジュールの面などで挫折を味わうこともありましたが、参加者の積極的な協力を受け、加えてテーブルチーフ同士の意見交換の場を每晚設けることで、次第に議論を到達点へと近づけていったのです。長い準備段階と濃密な本会議を経て、私達テーブルチーフは数多くの経験をさせていただきました。この経験を、国際学生会議の更なる発展と自身の成長の双方に活かし、将来へと繋げてゆくことで、私達の恩返しとしたいと思います。

数々のご協力を賜りました皆様、本当にありがとうございました。

各分科会報告

テーブル I

児童労働の再考

—未来を担う子供達のために—

テーブルチーフ 眞鍋 優

①議題の背景

国際労働機関（ILO）の統計によると 2010 年の時点で我々が住むこの世界には約 2 億 1500 万人の児童労働者と呼ばれる子供たちが存在しており、その割合は世界の子供たちの 7 人に 1 人が労働を強要させられている計算です。

様々な搾取的環境で働いている児童達は、彼らの健康を害し、彼らの生理的・心理的発育に取り返しのできないダメージを与えるような労働上の危険に日常的にさらされています。肉体的な暴力や性的虐待の対象となりやすい子供の召使いと共に活動しているハイチの精神分析医は、抑うつ状態、無抵抗、食欲と睡眠の異常、慢性的な恐怖と苦悩などの問題を指摘しています。

このような児童労働の根本からの撲滅は様々な要因が複雑に重なり合っているために困難な課題であるのは間違いありません。しかし児童労働問題を真剣に考える事は、企業の雇用形態の在り方、個々の人権の保障のされ方、教育の実現、国家の発展など様々な問題が複雑に絡み合っている世界の諸問題を同時に考える事に繋がると私は考えています。

②背景を受けて

これからの世界を担って行く子供達が上記のような悲惨な状況に苛まれている現状に対して同じくして世界を作る側の我々が見過ごしたままで良いのか。このような思いからこのテーブルを作っていく事を決意しました。

その為にこのテーブルのゴールを『世界における児童労働の現状を理解した上で、子供達をいかに最適な形で劣悪な労働から解放するか、加えてその後のアフターケアへのアプローチ方法を様々な目線や手段から探り、社会に発信する』と決めました。

③事前勉強内容

◆参加者招集会

参加者同士初めての顔合わせであったためテーブル内の目的を実行委員含めた日本人同士の交流と位置づけました。事前にスカイプで簡単に自己紹介をした事で参加者同士のイメージはしやすくなったものと思います。

まず初めにテーブル内でマトリクス自己紹介を用いてアイスブレイクを行いました。これは自分の興味がある事を紙に書き出して、関連する箇所を次々と繋げて行く事で相手との意外な共通点を見つけ出す事が目的で行いました。

普通に自己紹介をしていたら見つからなかったような共通点がメンバー内で見付き、終始賑やかな雰囲気アイスブレイクを終える事が出来ました。

次に事前に用意するように伝えてあった自己紹介プレゼンテーションを実行委員含め全員で行いました。率先して自分から手を上げて自己紹介をしようとするメンバーの主体性と想像以上の成果物に驚いたのを今でも尚覚えています。その後3人1グループのチームを2つ用意し、適宜メンバーとお題を変更しながら比較的容易なお題を用いて英語でディスカッションを行いました。

このテーブル内では常に本会議を想定して参加者には常に人前に立ってもらい、話し合った内容を皆の前で制限時間内にプレゼンテーションするという事を徹底させていました。日本人同士で議論をするのと外国人がそこに加わるのでは当然成果物に差が生まれますし、そこに至るまでの過程も簡単なものではありません。

だからこそ『どうすればわかりやすく相手に自分の意見を伝えられるか』を常に頭の中に抱えていてもらう必要がありました。

このセッションの中では自分が皆を代表してそのメンバー全員でのアウトプットとして相手に伝えなければならないので、参加者一人一人が議論の間もメモを取る姿や、より真剣に相手の意見に耳を傾ける様子が見受けられました。続いて現状として私が考えている本会議でのテーブル選定の背景や現状共有と『TED』にて著名な教育家のプレゼンテーションを題材として扱い、『これからの教育とはどうあるべきなのか』について英語で議論を行いました。

同じように最後に皆の前でプレゼンテーションをする事は同様でも、内容が高度且つ抽象的なものになると専門的な知識がある程度必要になってくる事をメンバー全員が意識できたと思います。メンバー全員が自分の思いを論理的に伝える事がいかに難しい事なのかを実感したと口を揃えて言っていたのが印象的です。

最後にその後の勉強会の日程調整等を行い本会議で扱う地域やモデル国を絞っていくのかそれともいかないのかについて話し合いました。

最終的には先進国の事情も絡んでくるこの複雑な問題を一週間で扱う為には

地域をある程度絞って局所的に考えていく方が現実的なのではないかといった方向性で参加者招集会は幕を閉じました。



◆第1回事前勉強会（7/13 立教大学にて）

参加者招集会以来の顔合わせとなりました。

この勉強会の主な2つの目的は、前回に引き続き簡単なお題でのディスカッションを通じた『英語発信能力のメンテナンス』と参加者招集会后に参加者に課していた『課題の共有』でした。アイスブレイクを兼ねた前者のディスカッションは“If you could live anywhere, where would you choose to live?”などの比較的自分の意見を伝えやすいものを挙げて行いました。

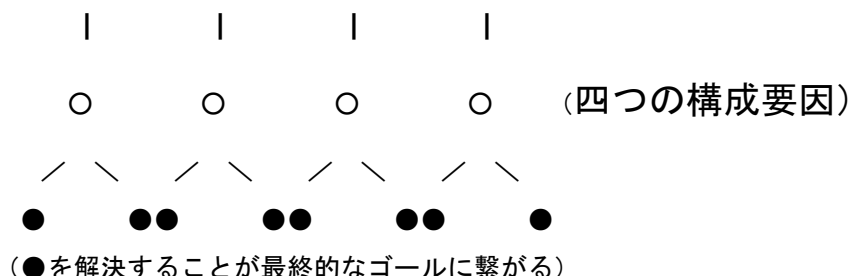
本会議では扱う内容が格段に難易化する為に語彙力の不足などから来る意見発信能力の著しい低下が見込まれるため、参加者招集会と全2回の勉強会を通して、いかにして自分の意見を明確に相手に伝えるかという点に重点を置いて練習を重ねました。このディスカッションでは相手に話の全体像を掴んでもらいやすくする為に、自分がそのように考えた理由の数を必ず最初に述べる事や、表面的な話を超えて議論に厚みを持たせる為に自己の経験を積極的に話に盛り込む大切さを学びました。後者の課題の共有に関してはヨーロッパとアフリカにおける児童労働に関して広い視野で調べてきてもらった内容を共有し、常に本会議を視野に入れて話し合いました。ヨーロッパに関しては15世紀からの児童労働の歴史を遡り、直接的な被害モデル国としての視点からではなく具体的に施行されている解決策の紹介まで行いました。

アフリカに関してはガーナをモデル国として、主に子ども兵士の問題に焦点を当て、一国内の現状把握から始め村単位の取り組みまで共有しました。

最後にテーブルとして最終的に解決すべき議題がILOの定めた最悪な児童労働を解決する手段を見つけ出す事であると再認識した上で、この勉強会の決議としてはその4つの構成要因（危険有害業務、児童ポルノ、子ども兵士、麻薬人身売買）の根本原因を今後深く洗い出して行く事に決定しました。

(以下はイメージ図)

最悪な児童労働を解決する



◆第2回事前勉強会 (8/14 同志社大学にて)

前回の勉強会から今回の勉強会の開催に至るまで数回にわたってスカイプ等々で日本人参加者間にて連絡を取り合い、前回の勉強会の決定事項を基にこの勉強会までに最悪な児童労働を構成する4つの構成要因を1人1つずつ担当し、皆の前で英語にてプレゼンテーションしてもらうように伝えていました。ここではあえて地域や国などは絞らずに概括的に調べて来てもらい、共有後に皆でこのテーブルはどの要素についてどこの地域や国をモデルとして話して行くべきなのかについて決めて行きました。その後第一回目の勉強会での決定事項にあった4つの構成要因の根本原因を挙げる時間に移りました。

危険有害業務に関しては農業や炭坑、建設業務などを具体的な業務として取り上げフィリピンでのゴミ集めの現状やマラウイ共和国でのたばこ産業の実態等から根本原因には教育水準の低迷や一国内での政府の機能不全等々が挙げられ、児童ポルノに関してはタイやカンボジア、ベトナム等々のモデル国の事例から年に12万人の児童が被害者として存在しており、そのうち80%がアジア圏である事等の情報を元に、宗教的理由を起因とした一国内での女性差別意識の満盈や内戦や自然災害によって孤児が増大している事などが根本原因として挙げられるのではないかと話し合いました。

こども兵士に関してはアフリカのウガンダや東南アジアのタリバンなどを事例に挙げ、貧困状態に陥っている国や地域において、軍隊などの需要側からすれば、子供は低コストで洗脳する事も容易で利用しやすい兵器として認識されている一方で、兵士になる、または誘拐されて兵士にさせられる子供達にも食事などの一定のインセンティブが働いており需要と供給が一定数成り立っている現状があることを共有しました。そして上記の地域での紛争の主な経済的要因は天然資源を巡っての争いであるために、双方にとってもメリットしか存在していない背景が存在しています。

麻薬人身売買に関しては、ブラジルでのストリーチルドレンや、ネパールでゴミ回収と比べて日当りで10倍以上の収入が得られる等の情報や事例から、政府基盤の脆弱さや社会的に子供は使い勝手が良い存在であるとの風潮が一定数存在している事が根本原因として存在していると考えました。

結論としてこの4つの構成要因の根本を辿って行くとやはりそこには『一国内の教育機会、質の欠如』『政府システムの機能不全』『絶対的貧困』『先進国の利益追求』の4つに収束できるのではないかと結論づけました。

同時に様々な国や地域の現状を見て行く中で同じ教育の問題解決でも地域・国によって格差、現状が違うことによってある一定のアプローチがすべてに適応されないことを再認識しました。

今後の方針として1つの根本原因を辿って行けば最終的に設定しているテーブルのゴールは達成できるものと合意した為、各4セクションのうち1つに絞って本会議にて話し合っていく事を決め、話し合いの結果、このテーブルはサハラ以南とバングラデシュにおける危険有害業務に関する解決策を模索する事に決定しました。この決定事項は外国人メンバーに報告し、第二回にわたる勉強会を終了と致しました。



④本会議内容

◆分科会 1 [アイスブレイク ～自己紹介～]

参加者全員が初めて一同に揃ってついに第59回国際学生会議が幕を開けました。自分と共にテーブルを作り上げるメンバーが今自分の目の前にいると思うと実行委員としてテーブルを作り上げて来た時間が長かったような短かったような不思議な気持ちになりました。内容としては事前に頼んでいた参加者全員の自己紹介をプレゼンテーションの形式で行いました。自分の趣味やこの会議に対する意気込み等々を一人一人がやや緊張気味な表情を浮かべながら堂々と

皆に伝えていく事で参加者一同身が引き締まったものと思います。

次々と一人一人国籍の違う参加者が壇上に上がると場は緊張感に包まれましたが、いざ質問をぶつけられると発表者含め全体が終始笑顔に包まれる和やかな雰囲気のまま分科会は終了しました。

最後に軽く明日以降のプランを口頭で説明しました。

◆分科会 2、3 [問題認識の統一と現状課題共有]

前回の分科会ではあまり時間が取れなかったので、このセッションではそもそも児童労働がなぜ問題なのか、なぜ我々学生が話し合う必要があるのかについてのメンバー間の意識の統一 (Consciousness concentration) からスタートしました。テーブルとして模造紙を用意しポストイットとペンを使って

“What’ s the exact problem?”

“Why do we have to solve this issue?”

“How can we approach this?”

以上の議題に関して4人一つのグループでブレインストーミングを行いました。そもそも児童労働がなぜ問題なのか、なぜ我々学生が話し合う必要があるのかについてのメンバー間の意識の統一からスタートしたこのセッションは、同じ問題に関心を抱きながらも国や文化、育ってきた環境が問題に対する根本的な認識の違いや各々が描くゴールにおける違いを生むのは必然であると考えたことに起因します。根本原因を洗い出していく中で子供達は守られるべき権利を有し、現代に生きる我々はこの問題を改善していく責務がある事を改めて確認しました。

その後日本人参加者に事前に課していた勉強会での決定事項に関するプレゼンテーションを行ってもらい、外国人メンバーとの知識の共有に努めました。



◆分科会 4 [サハラ以南におけるモデル国の決定]

前回の分科会を元にサハラ以南におけるモデル国の絞り込みに入りました。

日本人メンバーによる勉強会の決定事項に関するプレゼンテーションを経て未だ決まっていなかったサハラ以南におけるモデル国をメンバー全員で話し合った結果決定しました。決め手となったのはある国における民族の多様性がもたらす価値観の相違に起因する児童労働の満盈であり、その国はどのサハラ以南の国々よりも民族の多様性に溢れているガーナでした。ガーナにおいてはカカオ畑における児童の危険有害業務を中心としてサハラ以南の国々の中でモデル国に足る程児童労働が満盈している現状をテーブルメンバー全員で共有した結果、アジア圏のモデル国はバングラデシュ、サハラ以南のモデル国に関してはガーナを扱う事に決定しました。

◆分科会 5 [両モデル国における現状分析 ～共通点と相違点の認識～]

モデル国が決定した後にバングラデシュとガーナという二国における現状分析をテーブルメンバー全員で行いました。

バングラデシュにおける児童労働の最も満盈している形態はアパレル企業を中心とした海外企業の進出に伴う児童の搾取という問題です。彼等は企業の成長に会わせて悲惨な環境下で肉体的労働に従事させられており、ある企業の建設物が崩壊した事で何万人もの児童が亡くなった事件を代表にいかにして一国内で国民の意識を改革できるかについてメンバーの個々人の体験談等々を踏まえながら考えていきました。ガーナに関しては何百といわれる部族の分裂から政治体制がどの部族に関してもきちんと機能していない問題があり、政府が中心となって国を動かしているというよりも、古来より伝わる部族ごとのしきたりやルールによって地域が統一されている現状が有り、地域によって価値観がまちまちである事がわかりました。ガーナに関してはそこに我々がどのように立ち入る事が出来るかというアジェンダが生まれ、バングラデシュに置いては先進国の利益追求と国民の道徳的意識の形成において、どう折り合いをつけていくかについてひたすら議論を重ねて行きました。

二国においてはそれぞれの国における特殊な事情に基づく児童労働の形態があるなかで根本的には政府が機能していないのではないかという一つの共通点が見えてきました。どちらにおいても個別の原因から政府がリーダーシップを発揮して児童労働の撲滅に動こうとする動きが未だ見えてきておらず、共通して言える事は、いかにして一国内での国民の草の根的意識価格から政府という大きなシステムの意識改革まで行うかという問題でした。



◆分科会 6、7、8 [モデル国における解決策の模索]

モデル国決定を経て解決策の模索に移る段階になりました。

バングラデシュにおける西洋企業の進出に伴う児童労働の問題に関しては、まずなによりもメディアの力を用いて一国内における意識改革から始めなければいけないとの結論に至りました。そのステップをまず踏む事で政府にまで浸透させる事ができれば一国内での意識変革に繋がるとメンバー皆で合意がなされました。貧困に苦しむ国々全てに当てはまる事ではありますが、一国内または一地域内で子供は働くべきだといって一定の価値観的風潮が存在している現状があります。その彼らにとっての当たり前に関していかにしてアプローチをかける事が出来るかを考え抜いた訳ですが、この議論に関しては多様な国籍や価値観を有しているメンバーの中でも意見が割れる事が多々ありました。

ガーナに関しての最大の問題は民族や人種の多様性に伴う一国内外での規制取り締まりの欠如であり、その解決策として国民一人一人が部族内での対立に留まる事無く一人一人が国を動かしているのだと言った意識を持たせる為に、政府が主導となって部族間に働きかけ共通のルール作りに努めるよう事が最も現実的な対策なのではないかとメンバー全員で話し合いました。

その為には部族間における共通言語を広めて行く必要があります。それは世界共通言語である英語が良いとされ、共通言語を用いて部族間で積極的に交流を勧める事で自分が国を動かしているのだといった当事者意識を植え付ける事に繋がると考えました。このように政府が主導となって部族間の意識や取り組みの差を少しでもなくして行く事がガーナにおける児童労働に関する意識改革に繋がると皆で合意を形成する事が出来ました。



◆分科会 9、10 [成果発表会に向けて -資料作成とプレゼンテーション練習-]

いよいよ会議も終盤に近づきテーブル内での成果物も仕上がって来た為、サマリー発表に向けた資料作成と当日の役割分担を決める作業に移りました。

テーブル中には人前に立って話す事に自信を持っているメンバーが他のメンバーにプレゼンする事を勧めるなど自己の成長のみならず、チーム全員の成長も事を考えている場面があり、大変感動したのを覚えています。

最終的には大きく分けてプレゼンターと主に資料作りに回ってくれるメンバーと質問対応に回ってくれるメンバーに分かれて作業にかかりました。

資料は Prezi を用いる事で見に来て下さった方々を視覚的にも楽しませる事も意識しました。

⑤分科会まとめ

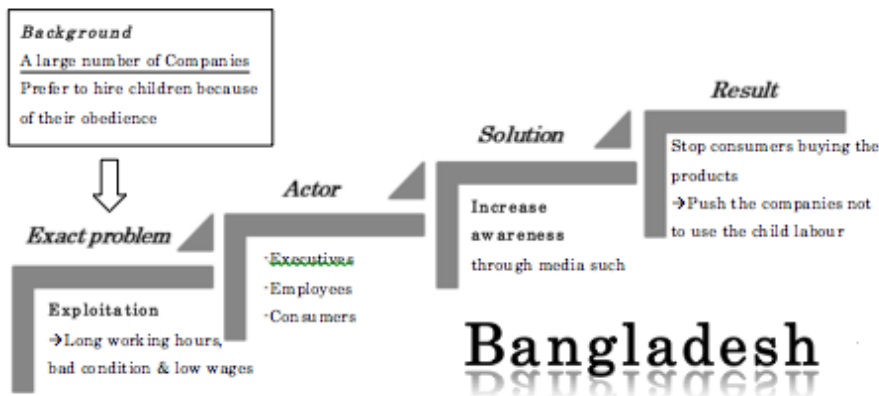
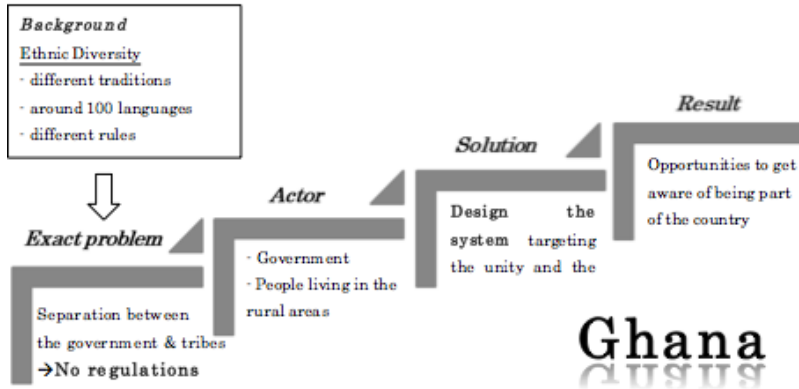
前提として児童労働には最悪な形態が 4 つ定められており、そのうちの 1 つである児童の健康、安全、道徳を害する危険有害業務を解決する事をゴールと決めました。そして局所的な事例を取り上げる為にモデル国をガーナとバングラデシュに決定しました。

そして両国における児童労働の共通点と相違点の洗い出しを行い、一国内の環境が児童労働の類型や特徴にも変化を与える事を再確認しました。

議論の中でガーナにおいての最大の問題は民族や人種の多様性に伴う一国内外での規制取り締まりの欠如であり、バングラデシュにおいては企業の利益追求を背景とした児童搾取であると結論づけました。これにより各国においての最大の問題が解決される事は私たちの議論のゴールである最悪な形態の児童労働の一つである危険業務の解決に繋がる事を確認し、上記の二国内でのそれぞれの個別の解決策を議論した結果を発表致しました。

(以下発表資料)

<Step for solving the problems>



⑥個人の感想

『児童労働の再考』このテーマに決定するまでにどれほどの月日が経った事でしょう。今ではそれがもう終わってしまった事も正直未だに信じられません。

この度初めてこの国際学生会議という大変貴重な機会に携わらせて頂きましたが、前回の引き継ぎ直後の自分はテーブルチーフとしての段取りや会議全体の雰囲気等々右も左も分からない状態でいきなり実行委員を務めさせて頂く事となり、正直不安で一杯でした。周りにいる他の実行委員やテーブルメンバーの心強いサポートがなければこの報告書を書く事は疎か、本会議の進行、そしてサマリー発表すらままならなかったかも知れません。心の底から優秀だと思える実行委員と一緒に一つのものを作り上げられた事を誇りに思います。同時に時には厳しい事も言って傷つけてしまった事もあると思いますが、文句一つ言わず最後まで付いて来てくれたテーブルメンバー全員に心から感謝したいと

思います。本当にありがとうございます。

このテーブル作っていくにあたって、自分の中での『リーダー像』というものを本会議前から本会議中、そして今でも考えています。この報告書においては便宜上参加者という言葉を用いていますが、私は基本的に参加者という言葉はあまり好きではありません。そこには常に『受け身のニュアンス』が顕在している為です。国際学生会議という場の中において受け身の姿勢、すなわち『自分はいくまで参加者なのだから言われた事だけに従っていればいいや』といった『指示待ちの姿勢』で得られるものはどれほどあるでしょう。この姿勢は本会議に限らずいかなる状況でも言える事ではないでしょうか。少なくとも自分のテーブルでは彼ら一人一人が『リーダーである意識』を持って欲しかった為に参加者意識は捨てるように常に伝えてきました。

そして会議が始まる前にこの1週間という短い時間の中で一人一人のモチベーションや価値観を常に尊重し、いかにしてチームとしてどれほどの成果を挙げられるのかという事を単純に異文化理解の為に楽しく過ごす事以上にテーブルチーフとして常に意識していました。なぜなら国籍も物事への価値観も違う11人が集まった時点でそれは一つのチームであるからです。『ここは誰かに任せておいて自分は上手い所で適当に発言して行けば良いや』といった意識をチームの中で一人でも抱えているとチームが機能しなくなる事は明白です。その点彼らは皆優秀で私は最低限の道筋を示すだけでその後はメンバー一人一人がリーダーシップを発揮して問題解決の為に主体的に取り組んでくれました。

同じくして今思えばテーブルチーフとして心がけた事は、恐らくどこのテーブルよりもアイスブレイクの時間に時間をかけた事であると思います。腹を割って議論を行う為には、同じテーブルに座る相手の事を、まず人間として好きになる事が不可欠です。加えて扱う内容が高度になるにつれてチームビルディングに時間を割く必要性がある事を、以前の自己の経験から既に認識していた為です。そのために、ただでさえ議論の時間には制約が有るのにも関わらず、直接的に議論に関係ない内容の取り組みを積極的に取り入れました。

ちょっとした遊びを通してでもそこから生まれる会話の一端一端が1つの『チーム』を形作っていきます。なによりもメンバー間の信頼関係を構築する事こそがこのテーブルや国際会議全体の成功に繋がると信じていました。そして会議全体の中で最終的に真のチームになったと思える瞬間に出くわした時には、感動して思わず涙を流してしまいました。それは同時に自分のやってきた事が間違いではなかったと確信に変わった瞬間でもありました。

最後になりましたが、この国際学生会議という経験を得られた事は間違いなくこれからの自分の人生の糧になりますし、しなければいけないと考えています。

現在の我々学生に出来る事はごく限られたものですが、前述したような『当事者意識』をいかなる場面においても持ち、『真のリーダーとは何か』という事を常に意識しながら私自身これからも何事も主体的に動いて行ける人間になっていきたいと思えます。そして自分の周りの一人一人がこの当たり前のように見えて難しい姿勢を持って行動する事が世界をより良いものにしていくと確信しています。自分を含め再び日本全土、将又世界に散らばったメンバーがこの本会議で培った姿勢を常に持って今を、そして我々が担って行くこれから先の世界で活躍していく事を願ってやみません。



テーブルⅡ

21 世紀の食糧安全保障

—アフリカにおける食糧難を解決するには—

テーブルチーフ：上田瞭

①議題の背景

人口と食糧の相関性を扱った代表的資料として『人口論』（トマス・マルサス、1798 年）があります。マルサスは人口増加を幾何級数的、食糧増産を算術級数的と捉え、人口増加が食糧増産能力を超えて進んでしまい、結果として地球規模で食糧が不足すると予測しました。しかし実際はどうでしょうか。日本などの先進国では食料廃棄量が増え続け、国民が食糧の獲得に対する危機感を抱くことは難しいという現実が存在します。『人口論』が著された 18 世紀末と現在では様々な点で事情が異なり、マルサスは特に、食糧増産を可能にする科学技術が後に大きな発展を遂げることを考慮することができなかつたのです。従って、彼の言う「地球規模での食糧難」は非現実的である、との見解を多くの研究者が示しています。しかしながら、視点を狭めてみると、長期に渡って飢餓に喘いでいる地域が地球上には存在していることが分かります。その中で状況がより深刻だと言える地域がアフリカです。国連世界食糧計画 (WFP) によると、中央～南部アフリカに渡る広い地域では栄養不足人口が 35%以上、という最悪な状態にあります。一方でアフリカの人口は今後爆発的に増加することが予測されており、経済成長を始めたアフリカ諸国と国際社会が一丸となって飢餓の解決を目指すことは急務となっています。

②議題を受けて

昨今の日本では、化学肥料等を使わない有機農業の促進や遺伝子組み換え食品の是非といった問題が頻繁に議論されるようになりました。飢餓という言葉が縁遠いものになるにつれて、人々の関心事が「生存のための食糧を獲得する」ことから、より高次元なものへと移り変わっていったと考えられます。しかしながら、飢餓が国民の身近に存在している国が世界には依然として多く残っているという事実を私達は忘れるべきではありません。人道的な理由はもちろんのこと、あらゆる経済・金融活動について国境がなくなりつつあるグローバルゼーションの中では、先進国の行動がその国々の飢餓の一因にもなり得れば、

またその飢餓によって先進国も悪影響を受け得るからです。従って、一見局所的に見える同問題を我々は決して他人事と決めつけることはできません。21世紀に現存する飢餓を人類共通の課題として取り上げ、その構造を知ることで、各国が確実に自国民を養える未来に向けた我々自身の布石としたいと考えます。

③事前勉強内容

◆参加者招集会

この日は日本人参加者が初めて一堂に会する機会となりました。そのため、飢餓問題に関する議論を行う事はせず、日本人参加者同士が打ち解けあうことを参加者招集会の目標としました。とはいえ午前の部では、飢餓という議題の選出理由や問題に対する個人的な見解、現時点での議論計画などを再度伝え、これから共に時間をかけて考える問題を再び認識しようとしてしました。

午後の部では事前招集会後 2 回行う事前勉強会の日程及び内容の策定作業を行いました。

飢餓問題やアフリカという言葉が、一般的な日本人学生にとって比較的身近ではないという点を考慮した結果、第一回勉強会では人類によるこれまでの食糧増産について、そして第二回勉強会ではアフリカ各地域の特性を学習対象にすることを決めました。そして、それらにむけて参加者各人に事前学習課題を振り分け、勉強会当日に各々が調べた情報を全員で共有できるようにしました。

ゲームなどを行うことはできませんでしたが、終始雰囲気は良く、12 人すべてのテーブルメンバー同士が打ち解けるという大きな目標を達成できたと感じます。

◆事前勉強会

割り振っていた各調査を、パワーポイントを用いて発表してもらう形式で進行しました。第 1 回事前勉強会では主に、議論的となる主要穀物と、「緑の革命」と呼ばれる 20 世紀後半に主に東南アジアで起こった農業生産性の飛躍的な向上事例とを分析しました。普段何気なく口にしてている穀物ですが、知らないことは意外に多く、食糧問題について関心がより高まりました。また、歴史的な食糧増産を支えた要素として化学肥料の発達や灌漑の広範な実施、品種改良気運の高まりなどが存在したことを確認しました。

第 2 回事前勉強会では、世界の他地域に比べて知識量が少ないであろうアフリカについて、東部・西部・南部と地域別に特徴を掴もうとしました。その結果、南部では比較的農業の近代化が見られること、国によっては農業に適さない地理的条件を持つことなどが分かり、本会議中に議論する対象国の候補を東部・西部の数ヵ国に絞ることができました。なお、両方の事前勉強会に参加者

全員が出席できたことは大変喜ばしいことでした。

④本会議内容

◆分科会1 [アイスブレイク]

実行委員含め日本人参加者は外国人参加者と初顔合わせということで、本格的な議論は行わず、1) 一週間の大まかな議論スケジュールの共有、と 2) 自己紹介及びフリートーク に 30 分の時間を割きました。あくまで予定ではありますが何日目に何を議論するのかということをおあらかじめ示すことで、参加者が常に議論の流れのイメージを持てればと考えたためです。その後の雑談では文化の差異についての話題等で大いに盛り上がり、これから長時間を共に過ごす一テーブルとして上々のスタートを切れたのではないかと振り返ります。



◆分科会2 [目標の再共有、過去・現状分析①]

発展途上国の飢餓貧困問題を議論し解決策を提示する際に、今回の会議では 1) 世界の貿易構造などを含む外的要因 (External) と 2) 国内の農業生産性上昇や農村環境改善などを含む内的要因 (Internal) を中核としました。会期を通して常に意識しておくべきなので、分科会の一番始めに再度そのことを全員で共有しました。

次に、上述の外的要因の範疇にあるトピックについての現状分析を行うこと

で、論点を整理し解決すべき問題は何なのかということを確認にしました。具体的には、アフリカ諸国に代表されるような飢餓に喘ぐ発展途上国と世界を繋いでいる食糧貿易構造について、先進国側の利益と途上国側の不利益をそれぞれ考えました。結果、1) 途上国内の食糧流通にまで先進国の巨大企業が深く関わり、そこから多額の利益を得ていることや、2) かつての植民地時代に始まる商品作物生産及び輸出が未だに途上国農業を支えており自国消費分の生産が不十分であること、などが分かりました。飢餓が決して一国内の貧しさだけに起因している訳ではないということを理解する上で、有意義なものになったと感じます。



◆分科会 3 [過去・現状分析②]

分科会 2 では飢餓に抱える途上国と先進国との繋がり現状 (=外的要因) を概観したので、この分科会 3 においては、飢餓国内の農業生産性向上を実現するという点 (=内的要因) に焦点を当てました。この目的の達成に向けては、上述の「緑の革命」が大変良きモデルケースとなるため、この歴史的な出来事について今一度学ぶ事が分科会 3 での作業となりました。本テーブルへの外国人参加者がフィリピンとインドネシアの出身であったため、本会議の事前に「緑の革命」の当事国としての視点を交えたパワーポイントを用意してもらい、この分科会場で全体に披露してもらいました。両国の状況に関する情報の共有により、緑の革命のような途上国内における農業発展には、1) 近代改良品種な

どの先端農業技術を供与する国際協力体制や、2) 灌漑や農民に対する経済的援助などを積極的に行う政府の姿勢、といった要素が不可欠であることが分かりました。一例を挙げると、高収量を誇る IR8 と呼ばれる稲の近代種は、フィリピンを中心として起こった緑の革命の主役となりました。この品種は当時のフィリピンが独自で研究・開発できるものではなく、アメリカの巨大財団が研究施設をマニラ市内に設立したことによって同国内で普及するに至りました。また、両国とも民主化を経て、より安定的な農業政策を行えるようになった過程を確認しました。

次に、これら東南アジアにおける先例を念頭においた上で、今回焦点を当てるアフリカの現状について議論しました。アフリカが抱える大小の問題と、「緑の革命」のような農業発展が同地域では滞っている現状とがどのように繋がっているのか、ということを確認することでよりスムーズに解決策に至ることができると考えたからです。政情不安や社会福祉の未発達などアフリカの普遍的な問題を全員で共有することで、モデル国選定時の予備知識としました。

◆分科会 4・5 [モデル国の選定・分析]

今回は最初からアフリカ大陸に焦点を絞っていましたが、ここで議論・リサーチ対象を 1 ヶ国にまで狭めることとしました。事前勉強会終了時点で既に 3 ヶ国程度に絞っていましたが、ここでは加えて外国人参加者にも候補を挙げてもらい、再度吟味を行いました。その結果、ガーナ、コートジボワール、ケニア、エチオピア、ブルンジ、コンゴ共和国、エリトリアという国家としての規模もまちまちな 7 ヶ国が候補として残りました。

選定の基準は飢餓の逼迫度合や農業のための地理的条件、政情、経済など多岐に渡りましたが、中部の内陸国ブルンジをモデル国とすることと決定しました。国連食糧農業機関(FAO)発行の” The State of Food Insecurity in the World (2012 年)”によると、同国では 2012 年時点で総人口に占める飢餓人口が 73.4% と最悪の水準にあります。つまり、解決すべき問題の緊急性を最重視した形となったのですが、国内農業発展への十分な実現可能性も考慮しています。具体的には、ブルンジの気候が農業に適している点や、民族間紛争が落ち着き、政情が安定しつつある点が根拠として挙げられます。以上の作業を経て、ブルンジが抱える飢餓問題の深刻さと、その緩和に繋がる可能性を持っているという点との両方を確認しました。次に、馴染みのないブルンジという国について更なるリサーチを行いました。特徴や問題をポストイットに書き出し、それらを分野別に分けて貼り出した模造紙を作成したところで、分科会を終了としました。

◆分科会 6 [外的問題への解決策]

ブルンジを含めた発展途上国と先進国との間に存在する食糧流通構造がどのように先進国の益し、途上国を蝕んでいるのかということを分科会 2 で確認したので、当分科会ではそのような構造・傾向に対する改善策を議論しました。その中で、搾取する側の先進国企業に対する思い切った規制が必要との声が複数上がりました。具体的には 1) ランドラッシュ（途上国の大規模農地に投資し生産の主導権を奪ってしまう傾向で、生産された農産物が現地に流通しない場合もある）や、2) 極端な低価格での途上国産農産物の買い上げ、といった傾向の見直しです。これらは基本的に先進国側の経済的利益を減らし、フェアトレードを実現することに繋がるので、彼らが重い腰を上げることが前提になると言えるでしょう。途上国の飢餓問題に対する国際的な危機感と、誰かが強いリーダーシップを持つことが肝要です。また、穀物の国際価格上昇にも与している穀物投機を規制するという案も出ました。アフリカ発展途上国の殆どが国民を養うための穀物を輸入に頼っている現状があり、穀物価格の下落と安定が短期的には途上国内で流通する食糧の増加に繋がるのではないかと考えたためです。

また、アフリカ連合などの地域統合の深化をもって、1) 先進国に対する交渉力の向上や、2) 自国利益に囚われすぎない域内貿易構造や緊急時の食糧融通制度の構築を実現するという意見も上がりました。

◆分科会 7 [内的問題への解決策]

・近代農業か有機農業か

今日では化学肥料や農薬を多用し大量に生産する近代農業と、環境や人体に配慮された有機農業が存在しますが、どちらを推進すべきか、という議論が起きました。比較的高コストで収穫までに時間のかかる有機農業を取り入れる余裕がある国とない国が存在することを話し合い、逼迫した飢餓を抱えるブルンジにはその時間的余裕も経済的余裕もないという結論がすぐに出ました。多く人命が優先されるのは至極真つ当であるものの、近い将来更に深刻化するであろう環境や枯渇性資源の問題を考慮した際に、この議論は、手段を選ばない増産ばかりを考えていた私達に対して一石を投じたものであったと振り返ります。

次に、自国内の農業を近代化させ飢餓を減らすためにブルンジ国内で実施されるべき方策を議論しました。最初に確認したことは、飢餓の 9 割以上が発生している農村部の生活・農業環境の改善については、1) 良い治安と安定的な政権、2) 経済的安定、の確立が前提であるということです。これらの点を収集したブルンジのデータと照らし合わせました。前述のブルンジ内戦が近年調停され、政情は安定しており、農業以外の産業の成長が待たれます。したがって、

政府は有意義な議論を行い、限られた資金を適切な政策実施に充てなければなりません。なお、ここにもアドバイザーとして NGO 等の団体が入り込む余地があるでしょう。

具体的な政策を見つける際には、ブルンジについての情報をまとめた模造紙を参照しながら作業を行いました。巨大な湖に隣接し灌漑可能な土地が多く存在するにも関わらず、実施に至っていない現状に対しては先進国からの技術協力などを受けて効率よく灌漑を進めていくことが必要であるなど、農業発展に繋がる施策を一つ一つ挙げていきました。また、農村部における医療や教育をよりよいものにしていくことで人材育成や労働環境の改善を図るなど、農村環境の向上も大きな意味を持つことを確認しました。

◆分科会 8・9 [プレゼンテーションの準備]

外的・内的問題に対する解決策を各々複数ずつ出し合ったところで、いよいよ報告会に向けたプレゼンテーションの作成に乗り出すことにしました。出し合った全ての改善方法を極限られた時間の中で十分説明するのは不可能なので、いくつかを選別する作業から始めました。それを終えた時点で、参加者には2つのグループに分かれてもらい、外的・内的要因のいずれかのスライド及びスクリプト作成を担当してもらいました。

9人の参加者全員が説明を担当するとしたため、常に持ち時間を気にしながら発表練習を行いました。



⑤分科会まとめ

飢餓問題に対しては、数多くの食糧援助計画が様々な団体・機関によって実行されてきました。大きな助けになっているのは事実ですが、その量は十分とは言えず、政府を経て人々に行き渡る過程で何らかの不正行為に遭う事例も少なくありません。その計画が今飢餓に喘ぐ人の命を救うことに繋がっている以上、効果的な手法であることに疑いの余地はありません。しかしながら、被援助国はこれに依存しすぎるべきではありませんし、援助国など国際社会も、被援助国にそう働きかけながら、共により長期的な解決策を追求すべきです。それなくして飢餓の撲滅は有り得ません。今回の分科会ではこの考えを前提とした上で、昨今の貿易構造の改善点や国内農業開発の進展などについて議論を重ねてきました。

ひとつ確認できたことは、現在の飢餓問題に対して先進国が持つ一定の責任と、その解決に対して果たし得る大きな役割です。その責任とは植民地時代にまで遡り、当時自給を果たしていたと言われるアフリカなどの途上国地域に対し自分達が是とし、好都合な農業手法や方式を強制したことに端を発するでしょう。現在は先進国主導で確立された貿易構造が彼らを蝕んでいます。この是正に加え、先進国は途上国内の農業発展に大きく寄与することが求められています。成長期をむかえているとはいえ、途上国のみの資本や技術でそれを達成することは容易ではないからです。先進国の振る舞いは飢餓とその解決の両方に大きな影響を持ちます。

2011年に世界を揺るがした中東の革命は、輸入穀物価格の高騰など国民の経済的苦境が一因となったとも言われています。途上国の社会状況が現代では先進国の経済にも影響をもたらすことを十分認識した上で、飢餓問題を考えることが必要だと考えます。

① 個人の感想

長い準備期間と本番での進行という役割を経て、自分に何ができて何ができないのかをよく理解できたと感じます。そして、そういった私が力足らずな部分では、他実行委員や参加者など周囲からの手厚い支援を受けることができました。今回、先頭に立って何かを進めるといった役割を初めて担わせていただきましたことで、その難しさ、自分の能力の現時点での限界、そして、周囲の協力がいかに頼もしく有り難いものであるかということを感じました。この10ヶ月の経験は、諸国際問題は勿論のこと、長期間であったが故に自分自身についてもよく知る機会となりました。

昨年の第58回国際学生会議には一参加者として議論に参加していました。しかし、今回いざフォロワーからリーダーへと立場が変わると、かかる圧力や責

任はやはり段違いに強く、重くなりました。去年奮闘するテーブルチーフを間近で見えてはいましたが、実際に自分でその役を担ってみて初めてその難しさを理解することができたのです。何事も、実際にその立場に立つことで多くを真に感じることができるということを改めて身を以て知りました。フォロワーとリーダー、連携する上でそれぞれが何に留意するべきなのかということ、国際学生会議の場で得た経験をもとに再度整理することで、グループワークにより貢献できる人間になれるよう努力します。

多国籍の学生から成る国際学生会議の運営に携わり、議論を主導させていただいたことで、感じたことや理解できたことは他にも多々あります。この10ヶ月間でのすべての経験を、将来の更なる挑戦に最大限に活用していきたいと思っております。貴重な機会を与えていただき、本当にありがとうございました。



テーブルⅢ

いじめと自立支援

—今私達にできること—

テーブルチーフ 澤本篤志

①議題の背景

近年日本の小・中における教育機関でいじめが多発し自殺にまで追い込まれる児童も数多く存在し、その内容は複雑化しこの問題の深刻さは明らかです。いじめ問題に対しては日本国も様々な対策を講じていますが、事態は一向に悪くなるばかりです。またいじめ問題とは近年急速に増加したのではなく昔から断続的に存在していたということを忘れてはならないでしょう。時代の変化と共に児童を取り巻く環境も変化したため現代のいじめと昔のいじめでは原因も方法もとても異なっているのが事実であり、昔はいじめといえば生徒間でのものがほとんどであったのに対し、現代の社会では体罰を理由に教師から生徒に対するいじめまで発生しています。児童を取り巻く環境の変化がいじめ問題をさらに複雑化し、学校が過ごしづらい環境になってきています。

②背景を受けて

私はいじめが教育機関で多発し、それが原因で自殺している児童の数が激増しているという事実を聞くたびに衝撃を受けます。これは普通のことではありません。人を死に追いやるといふ犯罪と同等の行為をしているのにも関わらず罪の意識のない加害者側の児童、誰にも心の内を明かせず自殺という手段を取らざるを得ない被害者側の児童の負の関係性が教育機関で顕著な問題となっています。いじめが身近に存在しない人々の中でも、メディアでの報道が増えてきたいじめ問題に対して関心を持っている人は少なくないでしょう。児童は環境の中で育ちます。成長の機会として与えられている教育機関でいじめが頻繁に発生することはあってはならないことであり、教育機関の在り方を再考し児童に暮らしやすい環境を提供することが急務となっているのではないのでしょうか。いじめとは人が感情を持っているが故に起こってしまう解決策のない問題とも言われています。しかし多様な国の人々の生の声を聞き、意見を交換し、価値観を共有する事によって、いじめに対する新しい対応の仕方が導きだせるのではないかと考え、このテーマを決定するに至りました。

③ 事前勉強内容

◆参加者招集会

参加者招集会では初めて全員が顔を合わせるということを踏まえてお互いを知り、仲良くなること、英語でのディスカッションに慣れることという二点に目的を絞りアイスブレイクと全般的な議題でディスカッションを行いました。

午前のアイスブレイクではマトリクス自己紹介というものを取り入れました。マトリクス自己紹介とは白い紙の中心に自分の名前を記入し、その周りに自分に関するワードを思いっただけ書いてもらいます。書き終わったらそのワードを自分で説明するのではなく、他の参加者に質問してもらいます。これにより自分で自己紹介をするよりも、より深く自分の情報を他者に共有し、自分との共通点を見つける事が出来るというものです。午後は主に英語でのディスカッションを行いました。前記した通りこのディスカッションの目的は参加者に日本語で議論する事と英語で議論する事の違いを感じてもらう事だったので、専門的な用語も出てくるいじめ問題ではなく、「女性専用者は廃止されるべきか」や「お金と愛どちらが大事か」など知識を特に必要としない議題を扱いました。議論の際、沈黙になることが幾度かあったので、話し始める前に考えすぎない事、自分の言った意見に対する反論を恐れない事、などのアドバイスをテーブルーフとして出しました。全体的な印象としては英語に苦手意識を持ちつつも、この会議を通して成長したいという意欲を感じる事が出来ました。

◆事前勉強会

事前勉強会は関東と関西で計 2 回開催しました。それぞれの担当国のプレゼンテーションを通し、いじめ問題に更に身近になり知識量を増やす事、また本会議前にいじめ問題に関する英語のディスカッションになれる事、この 2 つを目的として行いました。第 1 回事前勉強会では主にプレゼンテーション技術の向上、また発表内容の改善を行いました。参加者に共通して指摘した点は、発表内容に担当国のいじめの定義を踏まえたうえで、自分のいじめの定義に昇華させるというプロセスが抜けていた事です。他者とのいじめに対する認識の違いや共通点を明確化するために、まず自分のなかでいじめとは何であるかを明らかにするよう指示しました。関西で行った第 2 回事前勉強会では前回のフィードバックを反映し改善したプレゼンテーションの発表、及びまだ記憶に新しい大津で起きた凄惨ないじめ事件を取り上げてケーススタディを行いました。ケーススタディでは大津のいじめ事件を契機として制定されたいじめ防止対策推進法の有用性や、いじめ問題に親の責任はどの程度問われるかなど、家庭環境や法学的な視点から議論を進めました。

④ 本会議内容

◆分科会1 [アイスブレイク]

分科会1は参加者全員が初めて顔を合わせる場所でもあったので、個人個人が意見を発言しやすい環境を作るために、本会議の議題には入らずアイスブレイクを行いました。今回用いたアイスブレイクは“Truth or lie”です。これは事前に参加者に嘘を1つ含む自分に関する4つのストーリーを考えて来てもらい、他の参加者が嘘はどれか見抜くというもので、自分の変わった体験を簡単に披露する事が出来るため、参加者の間で終始笑いが絶えず、良い形でテーブル3のスタートをきる事が出来ました。

◆分科会2 [議論の流れ紹介・各国現状把握]

まず初めに参加者の意識の統合を計るためにゴールの確認及び、議論の全体の流れを共有しました。自分が何故このテーマを選んだのかも含め、自分の考えをワードにまとめて参加者にきちんと伝えることができたので目標の共有を確実に行う事が出来ました。今回テーブル3ではフィリピン、韓国、イスラエル、ベトナムの外国人参加者4人、日本人参加者が3人参加しました、外国人参加者にはそれぞれ自分の国のいじめの現状について、日本人参加者にはそれぞれ担当国を振り分けプレゼンテーションを行ってもらいました。プレゼンテーションからの学びは大きく、イスラエルのいじめの統計によると80%以上の学生がいじめに関わった事がないなど、他国に比べて全く異なる数字が明らかになり、議論の中での意見の多様性という点においても期待が大きく持てるものとなりました。



◆分科会 3 [いじめの定義付け・問題の原因分析]

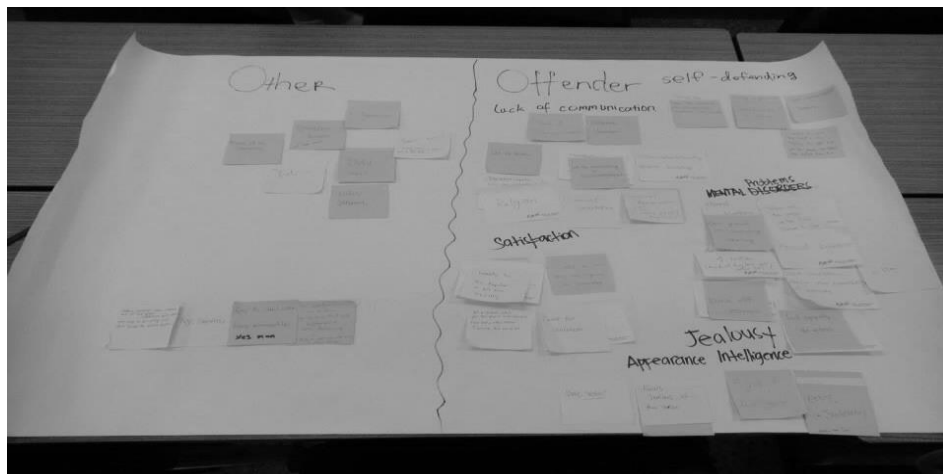
次に、いじめ問題が顕著になっている一つの原因であるいじめと遊びの境界線が曖昧になっている点に注目し、最初にいじめとは何であるか定義付けを全員で行いました。今回テーブル3ではいじめを“Repeated forms of mental or physical harmful acts from a group or an individual to others who are considered less in power” と解釈し、定義のポイントとして、継続的に行われている事、心理的もしくは物理的攻撃である事、力関係が不均衡である事が挙げられ、従来の各国で定められているいじめの定義とは異なる、テーブル3独自のいじめの定義付けを行いました。また以後の分科会ではこの定義を基準として議論を進めていました。次にいじめ問題の原因をポストイットを用いてブレインストーミングを行い、参加者に思いっただけ原因を列挙してもらいました。その結果多岐にわたる原因が浮かび上がり、類似する原因をまとめ、大きく分けて家庭環境、学校環境、加害者、被害者で分類をしました。中でも加害者自身の問題が多く指摘され、彼らの意識をどう変革し、更生させていくかが今後の論点となりました。

◆分科会 4 [原因のグルーピング]

前述した通りブレインストーミングした結果、様々な原因が導きだされたため、グルーピングを行うのが非常に難しい状況となりました。その上でいじめの被害者の問題を原因としてカテゴライズすることに対する矛盾と、家庭環境、学校環境、加害者の問題に分類する事の出来ない少数の存在を踏まえて、Domestic environment, school environment, offenders problems, others という4つに大きく再分類しました。

1つ目の家庭環境の原因としては家族内でのコミュニケーションが相互的でない事、つまり親からの愛情が不足している事や、自分の子供に対する関心の低さ、親としての責任感の欠如などが挙げられました。学校環境としては、学校の競争的な複雑なシステムが引き起こす生徒間の衝突、クラスの規模に起因する教師の監督不行き届きなど、学校を取り巻く人と環境が原因として挙げられました。次に議論の中で一番票を集めた加害者自身の問題として、いじめられる恐怖心による自己防衛手段、弱者を虐げる事によって得られる自己充足感、外見・知性・能力に対するねたみ、宗教・人種を含む相互理解の欠如、家庭環境にも関連する他者に対する寛容の精神が育っていない事などが挙げられました。最後にその他に分類されたものとして、近年数多くの国で深刻化しているネットいじめの原因としてスマートフォンやネットワークの普及、ネット上の社会的重圧の少なさなども挙げられました。原因のグルーピングにおいては模造紙を用いて参加者が主体的に動いていたので、前日よりも全員が議論に参加

しやすい環境が出来ていました。



◆分科会 5、6 [解決策の検討]

前回までの分析で出た原因をもとに、どうしたらいじめの数を減らす事が出来るかを考えていました。まず初めに出たのは Intercultural communication class 通称 IC と呼ばれる新しいタイプの道德の授業の設立です。従来の道德教育のほとんどは受動的なもので、どの国の参加者に聞いても生徒自身まじめに道德の授業に取り組んでいないという声があり、いじめの深刻さを理解させるためにも道德教育の刷新は必要不可欠であるという意見が多くありました。IC ではより児童が楽しさを通じて道德教育に打ち込めるよう、劇やディベートなどによる能動的なカリキュラムを軸に、いじめを経験したゲストスピーカーによる講演、先生も含むグループガイダンス、地域に貢献する事で道德心を高められるボランティア活動、両親も一緒に授業に参加出来るファミリーデーなど様々なアクティビティを取り入れることによって、早い段階から生徒の道德心を高められるのではないかと考えました。またこれに加えて児童が何か自分が誇れるもの・趣味を多く持つ事が問題解決の鍵になると考えました。趣味を多く持っている、必ずそれに興味を持ち共感してくれる人物はいます。児童がいじめを受け自殺にまで追い込まれている一つの理由として不安を共有する友人がいないという事が挙げられます。趣味を数多く持っていれば友人が多く出来るという訳ではありませんが、何らかの形で他人を魅了し、他人がそれに興味を持ち、集まり、何かを共有する事ができる関係になることができれば、より良いスパイラルが学校内に生まれるのではないかと結論に至りました。

◆分科会 6 [解決策の検討・プレゼンテーションの構想決め]

前回の分科会に引き続き解決策の検討から始まりました。この分科会で出た解決策は企業を通じて社会全体にいじめ問題の深刻さを伝える事、またネット

いじめを減らすためのネット規制強化です。1つ目の企業によるいじめ撲滅運動に関しては、企業で働く人々のいじめ問題に対する意識の向上、また企業が社会に持つ影響力を踏まえて、近年ほとんどの企業が行っている CSR を活用する事によって、会社の内側から社会全体にいじめ問題に対する関心を高められると考えました。CSR として学校内の問題に取り組むケースは類を見ないため、話題性があると同時に、企業に受け入れられる確率も低くなっていくという可能性も大いにあります。そのため最初は児童の両親にいじめの深刻さを認識してもらい、いじめに対する理解を企業というツールを使い社会に広めてゆくことが重要だと考えました。ネットの規制強化に関してはそもそも児童に対するネット規制が弱すぎるということを理由に、いじめを検知した場合には警告もしくは警察に出頭など厳正な監視及び処罰の強化が必要であると考えました。いじめをいじめと認識していない児童に、自分のした事の重大さを把握させることは、いじめ解決の第一歩であるため、法の強化はネットいじめだけでなく、全体的に必要な不可欠であると結論付けて分科会を終了しました。

◆分科会 8、9 [プレゼンテーション作成・練習]

発表時間が 10 分と限られていたため、プレゼンターの数を減らす事も考えましたが、参加者全員が発表を希望したため彼らの意思を尊重しました。Prezi を使うことによって視覚資料の充実を図り、オーディエンスが飽きないように努めました。

⑤分科会まとめ

分科会を通じて感じた事はやはり解決策の検討は難しいに尽きました。いじめはよく人が人である限り防ぎようのない問題なのかもしれません。私たちも様々なリサーチを行い、ディスカッションを重ねて行くほどに、いじめ問題の闇は深い事を痛感し、なぜいじめ問題がここまで深刻化し、児童がいじめを苦しみに自殺にまで追い込まれてしまうのか理解する事が出来ました。原因分析の部分でも記した通り、いじめは児童を取り巻く家庭環境、学校環境、加害者自身の問題など様々な要素が絡み合い発生します。そのため全てのケースに普遍的に当てはまる解決策は非常に難しく、自尊心を育てるなど小さなアプローチから道德教育の改革などの大きなアプローチまで多様な視点でこの問題に取り組む事が解決への第一歩なのだと考えました。今回この分科会を通して私たちが導き出した解決策は実用的なものではないかもしれません。社会的に軽視されてしまうようなものかもしれません。しかし確実に言える事は、多様なバックグラウンドを持つ学生が集い、自分の意見を交換し合い、新たな価値観を手に入れる事。またその結果としていじめ問題に身近になり、問題意識を

持つ事が出来るという事。これがいじめ問題に関わらず、すべての問題解決において必要なのです。私たち自身が今回感じたことを経験として完結せず、次に活かし積極的に問題に向き合っていけば、いじめ問題も解決へと向かっていくと考えています。

⑥個人の感想

自分の思い描いていたテーブルと現実のテーブル進行の違い、参加者として参加する事とテーブルチーフとして参加する事の違い、運営という苦労を共にした友人など、今回の ISC を通じて数多くの事を感じ、得る事が出来ました。中でも去年の ISC に参加した身としては「参加者」と「運営」の違いを痛感する ISC59 となりました。私自身ファシリテーションを自分一人で行うのは初めての体験であったため、参加者に不安を感じさせ、納得の行かなかった部分もあるかと思えます。自分でテーマを決めて、参加者を選考し、ディスカッションを行うこのテーブルチーフという役割は、とても責任の重い役職で、あの時にああしていれば、こうしていればという後悔がなかったとは決して言えません。しかし同時に言える事は、このテーブルチーフという役割を、拙いながらも無事にやり遂げる事が出来たという経験はとても価値のあるものであり、自分自身のスキルアップに大きく繋がったと思えます。いじめ問題に関する知識が深まったのはもちろんの事、個人個人の性格を理解する事がファシリテーションの鍵である事、運営側としての姿勢を崩さないことなどテーブルチーフをやらなければ得る事の出来ない事がたくさんありました。無事に ISC が終わった今一番に想う事は当時テーブルチーフに立候補するべきか悩んでいた時に背中を押してくれた方々への感謝、また行き詰まった時に助けて下さった方々への感謝です。分科会まとめでも述べた通り、この ISC を経験として完結せずに、これからの更なる成長に繋げていきたいと思えます。ありがとうございました。



テーブルIV

途上国におけるジェンダー格差を考える

—すべての人々が生きやすい社会を目指して—

テーブルチーフ 李禎み

①議題の背景

毎年3月8日は、国連が定めた「国際女性デー」ですが、どれ程の人がこの日の存在を認識しているのでしょうか。この日は、女性に対する差別撤廃と、社会開発への完全で平等な参加に向けた環境整備も目指してゆくことを目的に定められました。女性を取り巻く環境、解決すべき世界の課題の背景には、ジェンダーに基づく偏見や不平等、いわゆるジェンダー格差があるといわれており、世界的にジェンダー平等に向けた取り組みが進められるようになった今日、教育や保健、経済分野など様々な分野の男女間の格差は小さくなる方向にあります。

しかし、途上国においては、女性は依然として厳しい状況に置かれています。事実、途上国では全体の7~8割の女性が農村に居住し農業生産の主力を担っていますが、世界全体において絶対的貧困といわれる生活をしていると推測される人のうち、約7割が女性であるといえます。このような貧困層における女性の割合の増加は「貧困の女性化」と呼ばれ、近年貧困問題を論ずるにあたり、避けては通れない問題となっているのです。こうした状況に対して、国際協力の分野では、2015年までに世界の貧困削減を目指すミレニアム開発目標(MDGs)の8つの目標の一つに「ジェンダー平等の推進と女性のエンパワメント」が掲げられました。

以上のように、今日の社会において発展途上国の開発を論ずる際に、ジェンダー問題は一つの重要なファクターとなっています。ジェンダーによる男女の差別を解消し、個々の能力が活かされ、安全で安心して暮らせる社会を作っていくことは世界共通の課題であることに違いはないでしょう。

②背景を受けて

上述のような現状の考察を経て、私は、現代における男女の社会的・文化的立場の相違点や現行の解決策の検証を通して、途上国におけるジェンダー問題と真正面から向き合い、性別を問わずすべての人々が生きやすくなるような社会の実現方法を模索することをテーブルのゴールに設定しました。生物学的に

も決定的に違うこの男女を巡る問題は、まさしくボーダレスなものであり、様々な国から学生が集まるこの国際学生会議という場で話し合うのにはもってこいの議題であると思いました。

③ 事前勉強内容

◆第1回事前勉強会

私達のテーブルは、なるべく早く動き始めたいというテーブルチーフの意向から他のテーブルより一足早く、参加者招集会の一週間程前に第1回事前勉強会を開きました。当日の参加者への宿題は事前に共有していました。まずは、パワーポイント資料を用いた英語での自己紹介を1人10分という持ち時間で行ってもらいました。英語の練習という目的に加え、参加者同士お互いのことをよく知ってもらおうということで課したこの宿題ですが、各々個性がよく表れていてとても面白いものになりました。次に、議論の導入として個別に課したデスクリサーチの成果を一人一人に発表してもらいました。初回から本題に入るため、参加者が怖じ気づいてしまうのではないかと少し不安でしたが、勉強会を終えてみると、本会議への現実感が沸き、とても楽しみになったという声上がるなど、とても実りの多いものになったと思います。

◆参加者招集会

上述の通り私達のテーブルは事前に顔合わせを行っていたので、いきなり本題に入りました。他のテーブルが英語で進めて行く中、私のテーブルは語学力よりも知識の習得を重視したため、一切英語は使わずに全て日本語で効率的に進めて行きました。第1回事前勉強会での皆からのフィードバックをもとにそれぞれ追加調査を行い、その成果を発表してもらい、一通りの情報共有が終わった後はテーブルチーフとして総括を行いました。本会議での議論の流れの再確認や今後の予定を発表し、3週間後に控える第2回事前勉強会での宿題も最後に伝え、参加者招集会を終えました。

◆第2回事前勉強会

参加者招集会の終わりに告知した通り、参加者には、この会までに学術論文等の信頼できる文献を読み、まとめてモデル国として最適な地域または国を選出してくることを課しました。当日は、パワーポイントやワードでまとめた資料をもとに各々が自ら選んだモデル国/地域についてプレゼンテーションを行い、最終的に本会議で使用するモデル国/地域を全員で決めました。パキスタンやケニア、スリランカ、東ティモール等大陸を超えて様々な国が挙げられましたが、当該地域における問題の深刻性や妥当性など多様な観点から全員で評価を加えた結果、スリランカが私達のテーブルのモデル国となることが決まりました。

④本会議内容

◆分科会 1 [アイスブレイク]

日本人参加者は既に参加者招集会と 2 回の事前勉強会を通して打ち解けており、出会った当初のぎこちなさはすっかりなくなっていました。しかし、外国人参加者とは初めての顔合わせの場となるので、議論の本題には入らず、改めて日本人参加者も含めて全員に自己紹介を行ってもらいました。時間が制限されていたのと、一般的な自己紹介では盛り上がりには欠けると思ったので、マトリックス自己紹介というものを採用しました。紙とペンをいながら相手の質問に答えるという形の自己紹介で、双方向のコミュニケーションが自然と発生するため、初対面同士でも盛り上がり、頻りに笑いが起こるなど、本会議にむけた良いスタートを切ることが出来ました。


◆分科会 2 [各国におけるジェンダー意識の分析]

最初に、いきなりですが、事前に伝えておいた課題として、外国人参加者の方々に自国におけるジェンダー意識について各々プレゼンテーションを行ってもらいました。幸いにも、テーブルの外国人参加者はベトナム、フィリピン、インドネシア出身と全員出身国が異なり、東南アジアと一括りにされがちな国々の間でもジェンダー意識のレベルにかなり差があるということが明らかになりました。例えば、フィリピンでは女性は自由にかつ簡単に育児休暇を取ることが出来る一方で、インドネシアとベトナムでは、日本と同じように、制度は整備されているものの実際に休暇を取るとはとても難しいです。また、フィリピンからの女性の参加者は、フィリピンで生活にするにあたって女性が男性と比較して生活しにくいなどの不満は一切ないと言い切っていた一方で、ベトナムからの男性の参加者は、自分の国は、特に農村地域で、ジェンダーの固定観念による差別がひどく、大幅に改善する余地があると言っていました。以上のように、まずは出身国の現状について外国人参加者全員がプレゼンテーションをし、自国の状況を相対的に把握してもらった後、次は私達日本人が事前勉強会で学んだことについてプレゼンテーションを行いました。なぜ日本のことについてプレゼンをしなかったか、私達がどのようなレベルでのジェンダー格差について話し合っていくつもりなのかを中心に説明し、全体でコンセンサスを得て分科会を締めくくりました。

◆分科会 3 [ジェンダーに基づく固定観念についての考察]

この会は、より大きな視点に立って問題を俯瞰するために、「そもそも、男らしさ、女らしさとは何か」という問いを中心に、議論を展開していきました。

まずは個人の実体験を引き出すような問いを 4 つほど投げかけることで議論のきっかけを作り、ジェンダーの固定観念は、分科会 1 で確認した通り国に寄ってその程度に差はあるものの、普遍的に世界中に存在するものだとことを認識しました。次に、ホワイトボードとポストイットを用いて「男の子/男性から思いつく言葉」、「女の子/女性から思いつく言葉」をそれぞれ枠の中に列挙してもらいました。そして、その列挙された言葉は、逆のパターンでも適応するかどうか理由と共に話し合ってもらい、どのようにして我々はジェンダーの規範、つまり「男の子/女の子は〇〇すべき」という考えを習得するのかという議論に発展させました。最後に、ジェンダーの規範がより強くなることに対して各人がどのように考えているのか、二つのグループに分けて意見を出してもらったところ、私達の本当の潜在能力が十分に引き出されなくなるなど、参加者全員がネガティブな意見を述べました。よって、ジェンダーに基づく固定観念が強化されることは我々人類に良い結果はもたらさない、と結論づけました。

1. Introduction 

❖ Definition of the words

Gender

- Social difference between men and women

Gender inequality

- Refers to unequal treatment or perceptions of individuals based on their gender

11/09/01 Copyright © ISC59th. All rights reserved. 4



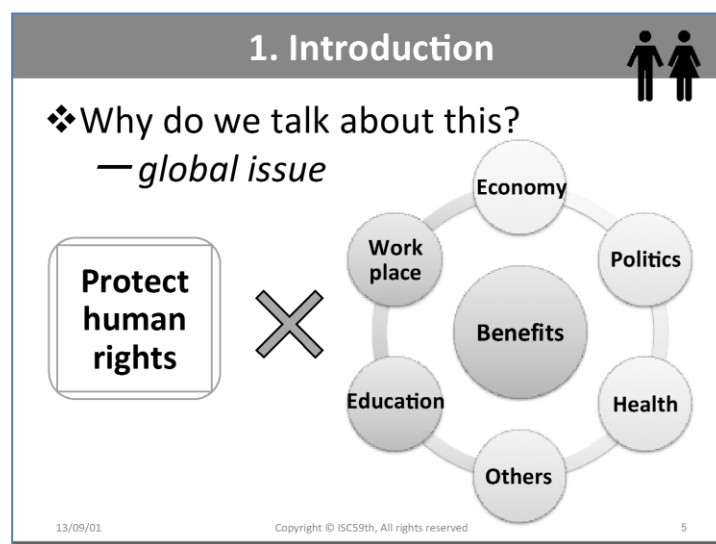
◆分科会 4 [女性のエンパワメントについての考察]

この会では主に、「女性が可哀想だから助ける」といった感情論のみに議論が依拠してしまわないように、「なぜ今女性のエンパワメントが必要なのか」という問いを中心に、ジェンダー格差の改善に世界が取り組むことの重要性について、全員でコンセンサスを取りました。まず、前日の分科会の内容の復習をするために、もう一度ジェンダー規範がより強固な世界における良い点と悪い点を二つのグループに分けて話し合ってもらい、各グループホワイトボードに話し合った結果をまとめてもらいました。もちろん、良い点もいくつか出て来たのですが、参加者全員、偏狭なジェンダー規範が固定化されてしまった世界では、人間開発はもとより、政治や経済分野においても悪循環が生じてしまうと結論づけました。そして今度は反対に、ジェンダー格差が解消された世界について考えてもらうことで、議論をより本質的なものに近づけて行きます。上述

したのと同じプロセスを追ってジェンダー格差が完全に解消された世界について話し合ったところ、この場合では、ジェンダー格差が完全に解消された世界は必ずしも人々にとっての理想郷とはなり得ず、そもそも実現自体が不可能だという結論に到達しました。というのも、男性と女性というのは生まれ持った身体機能が違うため、全く違う生き物であり、その違いを無視することは出来ないからです。しかし、それは、私達がジェンダー格差の解消に取り組む必要はないということを意味する訳ではありません。すべての人にとって生きやすい世界を目指すために、女性のエンパワメントは必要です。こういった意識をより強いものにするために、次に私達は、女性をエンパワメントすることによってもたらされる利益についてブレインストーミングを行いました。ここで留意したいのは、その利益を享受するのは女性だけではなく性別に関わらない世界中の人々だということです。政治や経済、職場、健康といった分野に分けてそれぞれについてもたらされる利益について話し合ったところ、全ての分野において、女性だけではなく男性を含めた全員が利益を享受出来るということが確認出来ました。以上のような流れから、私達は女性をエンパワメントすることの必要性と重要性について再確認をし、議論を締めくくりました。

◆分科会 5、6 [モデル国における解決策の模索]

分科会 3、4を通して得られた女性をエンパワメントすることの意義を常に念頭に置きながら、続く 2 回の分科会では、具体的にどのようにして我々は女性をエンパワメントすることが出来るのか、ということを探りました。一口に女性と言っても、住んでいる国によって状況は異なってくるため、まず我々が事前勉強会で選んだモデル国、スリランカに絞って話を進めていきます。スリランカの紅茶園で茶摘みの仕事に従事するある女性の物語をみんなで読み合い、その女性を取り巻く環境の問題点を洗い出しました。そして、その問題の解決に必要なものは何かを実現性などは考慮せずにブレインストーミングしてもらい、それぞれの意見を全体で共有しました。その中から、私達学生でも出来るような解決策を選んでもらったところ、人々の意識啓発を中心とした解決案が集まり



ました。問題解決には国内外の政策の改善が不可欠ですが、政府を動かすには人々の声が必要です。そしてもちろん、人々が声をあげるには、そもそも人々の間で問題意識が高まっていることが前提となります。しかし、現実には、スリランカの紅茶農園で働く女性を助けることを目的とした NGO 団体やプロジェクトが既にいくつも存在しているのにも関わらず、そもそも彼らの存在がスリランカの女性の間では知られていません。また、先進国に住む私達の間でも、自分達が普段飲んでいる紅茶がスリランカの女性の手によって作られているということを知っている人はあまりいません。私達は、このような問題に対する人々の認知度の低さが問題だと、スリランカの女性を取り巻く環境について話し合っていたときに結論づけていたので、どのようにして人々に意識啓発をしていくか、より具体的に、解決策の中身を詰めて行きました。私達はまず、意識啓発の方法をスリランカ国内と国外の二種類に分けて考えて行き、集まった案の中から、実現性や効率性などを判断基準としながら全員が良いと思うものを選択しました。そして、その解決策をどのようなプロセスで実現させるのかを詳細まで話し合っただけで、議論を締めくくりました。

◆分科会 7、8、9、10 [プレゼンテーション準備]

これまでの分科会でとても順調に議論が進んだため、本会議 4 日目にしてサマリー発表に向けた準備を始めることが出来ました。サマリー発表で行うプレゼンテーションは基本的に参加者が行うため、ここからはテーブルチーフはあまりテーブルの議論には入らずに参加者に全てを一任しました。ホワイトボードを使って全員でアウトラインを決めた後、各パートのコンテンツの詳細と担当者を決め、各々スライドや原稿などの資料作りに取りかかりました。一通りベースとなるプレゼンテーション資料が各パート出そろった後、次はテーブルチーフである私が書式やデザインを統一し、全員でプロジェクターやタイマーを使って入念にリハーサルを重ねました。



⑤分科会まとめ

一連の分科会を終えて、私達のテーブルが出した結論はおおまかに分けて 3 つあります。まず一つ目は、ジェンダーギャップを数値化した様々な指標は、

必ずしも当該国の現状をそのまま正しく反映しているわけではない、ということです。発表された数字ばかりに気を取られるのではなく、自分達で論文などを用いて実際に行われたフィールドワーク調査の結果などを追っていくことの大切さを、テーブルの皆が実感しました。そして次に分かったことは、男女の差を完全にフリーにすることは不可能であり望ましいものではない、ということです。この議題と矛盾していて、ある種のニヒリズムに陥った結論なのでは、と思う人もいるかも知れませんが、そうではありません。生物学的に身体構造がそもそも全く違う男女は、差が生じて当然なのです。それでも、私達は社会がその差を更に広げ、また新たな差を男女間に付与してしまうような事態を何としても防がなければなりません。国家の成長に女性の活躍が鍵となってきた今日、女性の権利を保護しようとする動きはますます助長されるべきものでありましょう。そして最後に、学生である私達は世界中に大きなインパクトを与えることは出来ませんが、このことを話し合っって意見を共有することに意義が有る、ということです。”It’ s only a start, but a huge start, to know what’ s happening in the world.” この一つのフレーズに、私達のテーブルメンバーの思いが詰まっています。

⑥個人の感想

第59回国際学生会議への参加を通して、私は様々な貴重な経験を得ることが出来ました。アカデミックな内容を英語で議論するのはもちろんのこと、更にはその議論の流れを一から自分で構築し、ファシリテーターとして上手く回していくということは、私にとって生まれて初めてのことで、本会議が始まる一週間前に不安や焦燥感に押しつぶされそうになったことを覚えています。そもそも今回このISC59において、去年の参加者でも運営者でもなかった私がテーブルチーフに立候補したのは、第一に二ヶ月半という長い夏休みの間に何か自分の自信に繋がるようなものを成し遂げたい、という思いからでした。実際に運営側として動き始めてからは、これまでISCに全く携わったことのない私は、ゴールが見えなくなったり、何をすればよいのか分からず路頭に迷うこともあったりと、本会議が始まるまでは会議の全体像が見えて来ませんでした。しかし、いざ本会議が始まってみると、テーブルメンバーの積極的な協力のおかげで、私が想像していたよりも遥かにスムーズに議論を運ばせることが出来ました。もちろん、私が伝えたいことが上手く英語で伝わらなかったり、参加者が裏で抱えていた小さな不安にすぐに気がつくことが出来なかったりと、自分自身の未熟な部分が目立ち一人夜にベッドの中で落ち込むこともありましたが、それでも今振り返ってみると、私は上手くテーブルを回しきった、と自信を持って言うことが出来ます。これも全てテーブルのメンバーに恵まれたお

かげであり、彼らの素晴らしい協力なしではこんなに素晴らしいテーブルは築けなかったと確信しています。また、一ヶ月程準備が出遅れた私を一から支えてくれた運営スタッフの皆にも、心から感謝しています。

今回得た経験は全て今後の私の人生においてかけがえのない財産となり、あの一週間はいつまでもキラキラと淡く煌めく思い出として私の心の中で残り続けるでしょう。しかし、いつまでも同じ地点に留まっているわけにはいかず、新たなステップを踏み出す用意を始めなければ行けません。国境を越えて私達人間を巻き込む世界の諸問題への飽くなき探究心は忘れずに、立派な世界市民の一員になれるよう、日々精進していきたいと思っております。

また、この報告書に目を通してくださっている方が、ISCに携わるという形を取らなかったとしても、何か新しい一歩を踏み出すきっかけになれたのなら幸いです。



テーブルV

高齢化社会を考える

—生涯現役で過ごすために—

テーブルチーフ 平間美冴

①議題の背景

周知の通り、日本を始めとした先進国で少子高齢と呼ばれる人口問題が起こっています。18世紀から始まる近代化政策や高度な技術は我々の平均寿命を格段に伸ばし、加えて女性の社会進出は出生率を甚だしく低下させています。反対に発展途上国と呼ばれる国々では人口爆発が起こっています。先進国から特に衛生面における技術を取り入れたことにより、出生率が大幅に下がることなしに寿命は延びたことが原因です。そのため、現在、地球全体で人類の寿命が延びています。私たちは、生きようと思えば最新の技術に頼ることでより長く生きることができる時代に生きているのです。

同時に、高齢者への支援がこれまでの医療制度・福祉制度では足りなくなってきました。直接的にも間接的にも、彼らを支えているのは現役世代と呼ばれる私たちですが、今やその相対数が不足し始めているのは高齢化社会国家が抱える大きな問題です。よく言われるように、現役世代を増やす、つまり出生率を上げるだけでこの問題は解決となるのでしょうか。支える側の努力や労力を増やすだけが解決策なのでしょうか。少子化が起こる原因として、先に述べたように女性の社会進出や、男女共に人生の選択が自由化・多様化したことが挙げられます。新たな命を授かることは、どれだけ環境を整えたとしても、最終的には個人の人生選択に委ねることになってしまいます。高齢社会の問題を改善するために、現存の生命に望みを託すことはできないのでしょうか。つまり、現役世代の労力に頼るだけではなく、高齢者自身も頼られる側になる方法はないのでしょうか。

②背景を受けて

最近では日本において取り立てて少子高齢化社会について議論されることはないですが、それはある意味現状が当たり前となってしまったからでしょう。年金問題、医療費問題、介護問題、孤独死に象徴される地域社会のコミュニティの問題…少子高齢化社会を取り巻く問題は様々です。私たちはこれらの問題を経済的に支援すれば何とかなる、と誤ってしまっているような気がします。現

行のサポート体制としては、財政面と労働面という大きく分けて2つの側面での支援体制が見受けられますが、財政面は公費に関わる話題が多いと思われる。折角学生と名の付く会議ですから、学生である私たちができることを考えてみる方が興味深いでしょう。

世界的に寿命は延び続けており、一国がどのような経済状況でさえ、国内の高齢者とどう向き合っていくかを考えることは私たち若者にとって避けられない課題です。私たちが彼らを一方的に支援するのではなく、互いに必要とし合い、支え合っていくことはできないのでしょうか。「生涯現役」という言葉があります（日本生涯現役推進協会より）。そこにはお互いが支え合い、生きがいを持ち、真剣に考えて社会に役立つ高齢者像が描かれています。高齢者の自活支援や、高齢化社会に対する制度について再考することで、現役世代の負担を減らし、高齢者も生き生きと過ごせるような、全世代が「生涯現役」で過ごせる社会を考えるべきです。

特に、支え合い、助け合いという面で、人と人との関わり方やつながり方はこの問題を考える上で重要になってくるでしょう。会議ではこの点に焦点をあてて話していきたいと思います。

③事前勉強内容

◆参加者招集会

初めての顔合わせということで、自己紹介やアイスブレイクから始めました。国際学生会議の事務的な話から、問題テーマの話を進めるか少し悩みましたが、参加者に私がなぜこの問題を取り上げようと思ったのか、どういう風に話を進める予定かという話をしました。そのうえで参加者からの疑問点や要望を聞きました。また、初めて参加者と接する機会だったので、彼らの性格や人間関係の観察、テーブルの雰囲気への把握にも努めました。

◆第1回事前勉強会

テーブルテーマの話し合いに入る前に、国際学生会議に参加するにあたり、異文化交流とはどういうことか、英語で話すとは何を意味するのかをパワーポイントを用いて説明しました。

本題では高齢化社会という観点から日本の社会の在り方について分析しました。例えば都市と地方ではどのように福祉環境が異なっているのか、という高齢化社会全般の話から始まり、高齢者と地域コミュニティの話に焦点を当てて話しました。日本では多くの場合、定年退職後に「生きがい」を持たずに人生を持て余してしまっている高齢者の存在がよく話題に取り上げられます。家ですることもこれとってあるわけでもなく、外に出てみるものの行くあてもな

く、駅のホームで新聞を読んで時間をつぶす高齢者もいるようです。こういった人々の行き場のないエネルギーを利用する方法はないのでしょうか。

一つの案として、地域コミュニティの象徴的な場所をうまく使うことができると考えられます。役所、図書館、郵便局、駅などは誰にでも開かれた空間であり、一定の間隔で所在しています。こういった場所でワークショップなどを行い、世代間交流の企画を行うという方法です。

◆第2回事前勉強会

第2回事前勉強会では、第1回事前勉強会を受けて、象徴的な場所として何が挙げられるか、また前回は日本のことに焦点を当てて調べていたので海外の現状にも目を向けるために、高齢化社会問題が顕著な国・見込まれる国の2つを調べパワーポイントを使って発表してもらいました。高齢化社会問題が顕著な国として韓国、イタリア、フランスや、見込まれる国としてインドネシア、シンガポールなどが挙げられました。本会議中にこういった他国の予備知識がヒントになると思います。

④本会議内容

◆分科会1 [アイスブレイク]

日本人参加者とは事前勉強会で既に顔を合わせていましたが、外国人参加者を迎え、テーブルメンバーが全員揃った瞬間でした。この7人が私のテーブルメンバーなのだと思うと、喜びと共に改めて身の引き締まる思いでした。

アイスブレイクとして、自己紹介を始め事前研修旅行の感想を聞き、フリートークを行いました。事前研修旅行で知り合っていた参加者も居たようで、その思い出を共有することがテーブルメンバーの交流の入り口になっていました。時間に余裕があったので参加者から提案のあったゲームを行い、感興が醒めないまま分科会1を終えました。

◆分科会2 [問題提議]

既に高齢化社会におけるコミュニティの問題を扱うことは選考の段階で全参加者に伝えており、事前勉強会でも高齢者とコミュニティとの問題を探し出し現存する解決策を調べるなど知識のインプットの作業をしてきましたが、高齢者とコミュニティの具体的な問題は提示していませんでした。議論を開始する初めての分科会だったので、ここで今まで事前勉強会の内容の共有及び私から「孤独死」という具体的な高齢者とコミュニティの問題提示を行いました。

事前勉強会では特にある問題に焦点を当て調べていなかったため、日本人参加者にとっても知識が十分に蓄えられていることではありませんでした。しか

し日本人参加者も知識が十分でない問題を取り上げることは、幾分利点がありました。それは初めて議論を行う外国人参加者と比較的スタート地点が揃っているため、日本人参加者と外国人参加者の壁がないように感じられた点です。

そのため、始めから議論という議論を行うことはせず、お互いの国の高齢者、高齢者と社会の状況を教え合うことから始めました。これは先に挙げた孤独死の問題に限らず、ブレインストーミングのように何か聞きたいことがあれば相手に訊く、といった形で議論というよりはトークという感覚で行いました。グループも特に分けることはせず、円になり、自由に移動しながら話し合うことで「孤独死問題」の入り口である高齢者問題について気軽に各国の現状を教え合いました。

◆分科会 3 [コミュニティの分類]

孤独死問題を考えるときに、コミュニティとは何かを考える必要がありました。なぜなら孤独死問題の大きな原因は、人と人とのつながりの希薄さにあると考えられるからです。人と人との関わり方には様々な種類が考えられます。例えば家族、塾での友人、最近よく聞かれる「ママ友」など、人と人との関わり方は様々です。「名称」を挙げると、そこにはある一定の集合体が垣間見えます。人と人とのつながりは広まると集合体、つまりコミュニティと呼ばれている集団になるのです。

コミュニティを考え直すために、まずどのようなコミュニティが考えられるかブレインストーミングをし、分類しました。どのような種類に分けることができるかは参加者からの意見を取り入れ、参加者がどのような視点から問題分析をしているのかを俯瞰しながら進めました。(表 1)

	Activity Profitable	Activity Non-Profitable	Living
Political	Education (Official)		Home for aged Health Town (in Vietnam)
Cultural	Education (Language)	Church	Sado
Social	Education CSR	Internet (Economic) Sports Volunteer	Health Home Town
Economical	Education Work (NPO)		

表 1 : コミュニティの分類

もちろん参加者全員の共通認識として分類されているものもあれば、個々の社会や文化に沿った分類もあり、社会の文化的側面も見えてきました。限られた時間で一定の数のコミュニティを挙げることは少々強引な作業でしたが、コミュニティというものを理解するうえで重要な「どのように分類するか、どのような分類があるか」という作業は十分に行えました。



◆分科会 4・5 [テーブル内プレゼンテーション]

成果発表の予習も踏まえ、孤独死についてのプレゼンテーションを2グループに分かれて行ってもらいました。各グループに孤独死についての現状、孤独死の原因、孤独死がもたらす影響、孤独死の解決方法を調べ、まとめてもらいました。

「孤独死」の定義とは、誰からも看取られずに死んでしまうことです。多くの場合、1~2週間後に彼らの死は発見されますが、特別高齢者特有の死ではなく、多くの人に起こり得る問題なのです。そしてこの問題は日本特有の問題だと思われまます。日本では都市化が進み、家族間の関わりも薄れ、人の流れが流動的になり、住居の隣人さえ把握できない状況が起こっています。また興味深いことに、英語で孤独死にぴたりとあてはまる言葉はないのです。孤独死は前述の通り特に対象が決まった問題ではありませんが、高齢者に多いと言われ、原因は定年退職後や孤立社会を背景とした人との関わりが薄れた高齢者自身の社会的孤立にあり、社会的立場の低下や社会貢献度合いが低いと思うなどの自己尊厳の意識低下などの影響が考えられます。このような状況は高齢者をより中へ中へと内気にさせてしまいます。

解決策としては、どちらのグループからも「家族の存在が必要である」とい

う意見が出ており、家族同士の密なコミュニケーションがあれば孤独死は防ぐことが可能ということが全員一致の解決策でした。しかしながら現状をみると、日本のように都市化が進んだ国の中には、経済の中心都市に若い世代や現役世代が働くために地理的に世代が分断され、日々の生活の忙しさから心理的な距離も遠くなってしまい、家族との関わりが薄くなっている国や地域もあります。では、家族の補完要素としてコミュニティに頼ることはできないのでしょうか。事実、人間の営みは人と人との関わりが重要な位置を占めています。関わり合う人が多ければ多いほど、その人が孤独になってしまうときや緊急時に、誰かが気にかけてくれる頻度がかなり高くなることは容易に想像できます。そのため今後の議論では、家族の補完要素としてのコミュニティやそのシステムについて続けて話し合うことになりました。例えばベトナムでも引っ越しをするとその街自体になじむことができないという問題が挙がりました。補完としてのコミュニティ在るべき姿を再考しなくてははいけません。

さて、コミュニティのあるべき姿を考える前に、家族とコミュニティとはどのように違うのでしょうか。恐らくこの二つの違いを明確にしなくては、理想のコミュニティ像は見えてこないでしょう。家族とコミュニティそれぞれの特徴は以下の表2のようになりました。では、次に家族とコミュニティはどのように関わりあっているのでしょうか。話し合いの結果、二つの案が出てきました(図1)。図1の左の図は、家族がコミュニティの中で特徴的な、他のコミュニティとは少々異なる特別な意味を持ったコミュニティとみなし、右の図では、人と人の関わりの最小単位の規模が家族であり、家族の存在を基盤としコミュニティが成り立っているということを表しています。これらの考察を元に、コミュニティに必要な役割を議論していきました。

Family ⁺	Community ⁺
Internal ⁺	External ⁺
Kinship ⁺	Having the same goal ⁺
Living together ⁺	Geography, Space, Time ⁺
In love ⁺	Stake ⁺
Unable to leave ⁺	Belief (Tradition, Culture) ⁺
	Law ⁺
	Human race ⁺
	Nationality ⁺

表2：家族とコミュニティの違い



図1：家族とコミュニティの関係

◆分科会6・7 [コミュニティに求める役割、プレゼンテーション準備]

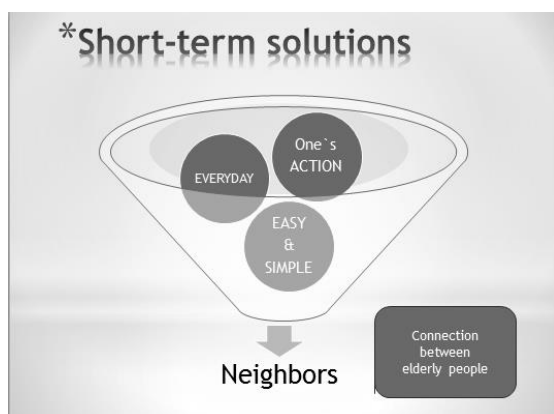
分科会5では孤独死問題の解決に家族という存在が最も重要ではあるものの、それが上手く機能しない場合はコミュニティがその補完要素となる、という結論が出ました。孤独死と家族との問題は、家族間の関わりが薄く、年齢の上があった家族の面倒を見きれないことですが、これは家族内での高齢者に対する思いやりや関わり方を現役世代が見直し、若年層が将来その姿を真似できるような環境作りが大切です。

家族の補完要素としてのコミュニティに求められる要素は、他人であっても持てる強いつながりでしょう。解決策として、現状の孤独死問題の悪化抑制を期待する短期的かつ高齢者に的を絞った策と、将来的に孤独死者数を減少へと導く長期的かつ全世代を巻き込んだ策が考えられます。短期的な解決策としては、早急に若い世代の労力を十分に供給することは難しいため、高齢者が高齢者同士を互いに支え合えるシステムが必要であり、一方で長期的な解決策としては、全世代を巻き込み、高齢者を含めたすべての人が当然のように互いを支え合うことができる環境作りが理想と考えられました。またどちらの解決策にも考慮すべき点ですが、特に短期的な解決策として、コミュニティを元々持たない人々、コミュニティに入ることを望まない人々をどううまく取り込むことができるかが重要になってきます。長期的な解決策は、そういった人々も将来的に自然と大きく取り込むことができなければなりません。

以上のことを踏まえ、短期的な解決策としてはイエローフラグのようなシステムの導入が望まれるでしょう。「イエローフラグ」は、毎朝起きたら玄関口に支給された黄色い旗を置くという単純かつ明快で、日々の習慣として行うことができるシステムです。日々の習慣を共有することで、お互いの生活を知り、小さな異変にも周囲が迅速に気づく効果が見込まれます。長期的な解決策とし

では、シニア・クロップのような高齢者の社会貢献のシステムの導入が挙げられます。これは高齢者の得意分野を生かして彼らをその道の専門家として受け入れ、次世代にその技術や経験を共有するワークショップのことで、若年層と高齢者の交流促進、高齢者への尊敬など、高齢者との交流が当たり前であるという環境を生み出すことができます。加えて、このようなワークショップでの同世代の交流も、将来彼らが高齢者になった時の同世代間の支えのきっかけになると考えられます。

以上を成果発表会におけるメインの解決策として、残りの時間はプレゼンテーション準備に費やし、スピーチの担当割り振りやスライドの確認、リハーサルを行いました。成果発表会では、参加者全員に話す時間を振りました。流れとしては、高齢社会である日本特有の孤独死の問題はこれから他の国や地域でも起こり得る潜在的な問題であり、日本をモデル国として孤独死問題への解決策をまとめた形となります。参加者の顔にも緊張の様子が見られ、直前まで原稿を何度も読み直す姿が見られました。時間は与えられたものより少し短い程度で終わりましたが、十分な内容だったと思います。



⑤分科会まとめ

高齢者問題は多くの諸問題と関係し、それらを包含するような曖昧さを持ち合わせています。その中でも孤独死という具体的かつ日本以外に前例のない問題を取り上げることで、議論の密度が濃くなり、より深く考えやすいものになったと思います。

孤独死の問題を防ぎ、減少させるためには家族という存在だけでなく、コミュニティという人と人との関わりが重要になります。現状を見るとコミュニティはないどころか溢れかえっているように見えますが、コミュニティというものは友好的であると同時に閉鎖的な面も持ち合わせているため、介入できない人がいることは孤独死に大きく関わる問題でしょう。既存のコミュニティに入

するためには、本人の意志だけではなく、コミュニティ側の意向も慮られてしまうのです。気軽に人と接することのできる環境にするために、このコミュニティの持つマイナス側面を一回排除することが望まれます。原点に帰れば、コミュニティは人のつながりの集団であるため、人と人、個人レベルでの関わりに焦点を当てるべきでしょう。今回は時間の関係から既存のアイデアを例として挙げる形になりましたが、一度コミュニティを白紙に戻し、再建する新たな方法の模索が急務です。

⑥個人の感想

昨年は第58回国際学生会議に参加者として携わらせていただきました。ここでは、個人の育った環境レベルの文化の壁を乗り越えなければ人と人とは分かり合えない、ましてや「国際」を語ること、そして世界平和への貢献の話し合いなどできるはずがないということを悟りました。そして何より、一人の人として、相手を理解する姿勢や、伝えようとする姿勢がどれほど大切かということを知りました。では、どう伝えるのか。言語は古くから伝達的手段として人間の営みを支えてきました。そして、現在、「伝える」ために英語という道具がどれほど大きな鍵を握っているかは、第二言語や外国語として英語がこれほどまでに多くの人々に流布し、世界公用語となっている状況を見れば誰しもが認めざるを得ないでしょう。

国際学生会議に参加するにあたり、すべての関係者に「ある程度」の英語力はもちろん必要であり、しかしそれに明確な基準を出すことができないということも明らかな事実でした。この会議において「伝える」ために必要な能力の道具は英語ですが、前述した通りやはり最も大切なものは相手への姿勢でしょう。前回の参加者としての反省を踏まえ、私が最も重要視したことは相手への理解を重んじる一週間にすることでした。それは、例えば分科会で行われるような話に出てくる各国・地域の文化的違いから、普段の生活における個人の習慣まで、相手に興味を持ち、接し、理解に努める姿勢でした。もしこの方向性で進めると、ただの文化交流会になってしまい、私のテーブルは十分な解決策が見出せないかもしれません。しかし、とにかく異文化理解を深め、相手を知り、互いに友達になり、終わった後に「楽しかった。参加してよかった。」と言ってもらえるような一週間にしたかったのです。

そのために、本会議中の議論の方向も、日本中心の話ではありましたが、日本のことだけを扱うのではなく、他国・他地域の情報を基に日本・各国地域を再考するというようにしました。幸いにもテーブルのメンバー全員が、多文化理解に興味を持ち、学び、情報を吸収している姿が常に見られ、良いテーブルメンバーを持ったと身に染みることが多くありました。会議が終わり、それぞ

れの家に戻った後でも連絡を取り合い、” I miss my table members.” を何度も聞くことができ、テーブルチーフとして参加させていただき本当によかったと心から思いました。また、未熟な大学生の身で、約10か月という長い期間、一組織の人員として何かに携わることがどれほど貴重な経験であるのかを多くの場面で痛感致しました。第59回国際学生会議でのすべての出会い、経験、出来事、そして運営に関わっていただいたすべての方に、この場を借りて感謝申し上げます。

最後に、国際学生会議は、世界規模で取り上げられる各所の問題について生の情報を基に世界各国の視点から改めて考え直すことができる良い機会です。しかし、一週間寝食を共に誰かと過ごすことは、自分の世界の外を見るだけでなく、自分自身の内側、アイデンティティを見直すきっかけにもなります。「国際」を語るとき、「自分」を知っていることがどれだけ重要なことか、気づいている学生はそう多くないものです。私たちは何らかのきっかけから、自分の文化、言語を始めとするアイデンティティを知るべきです。国際学生会議が、参加者の方々ひいては実行委員それぞれにとって「自分」を見直し、再考するまさにそのきっかけになり、その先も彼らの人生の糧となればこれ以上のことはありません。第60回国際学生会議、続く第61回以降においても引き続きの成功を祈っております。



総務総括

総務部長 伊藤優衣

第 59 回国際学生会議は、「ボーダレス社会と理解の壁 -世界市民として考えること-」という総合テーマの下、7 日間という日程での開催となりました。

最大の目的である分科会の他、毎年行われている日本文化体験、各国文化紹介、研修旅行、各種パーティーに加え、今年は新しい試みとして「カフェトーク」という企画を行いました。多様な文化的背景をもった参加者同士が、互いに其々の国の習慣や考え方について自由に談話し自分の目で確認することで、メディア等で植えつけられていた固定観念との違いに気づく機会になればと思いい組み込みました。様々な国の学生が集う国際学生会議の特徴を生かしたプログラム構成になったのではないかと思います。

本会議最終日を迎えるまでは参加者の方に本当に満足していただけるかという不安を抱えていましたが、会議終了後には沢山の参加者の方から「楽しかった」というお言葉をいただきました。また、様々な国の方と関わり考える機会が多かったこともあり、「自分の今後を考えさせられるきっかけとなる会議であった」というお言葉もいただき、総合テーマに沿った会議を開催することができたのではないかと自負しております。

各プログラムがこれほど円滑に進行できたのは、ご協力していただいた各団体、参加者の方のお力添えがあったからです。この場を借りて御礼申し上げます。

総務部長として至らぬ点も多々あったと思いますが、今年度の反省を踏まえ、今後の国際学生会議がより良いものとなるよう、一層努力してまいります。

最後になりましたが、第 59 回国際学生会議を無事閉会することができましたのは、本会議のみならず、企画段階からご支援、ご協力いただいたすべての方々のおかげです。58 回続いてきたこの国際学生会議の 59 回目に総務部長として関わることができたこと、参加者やご協力いただいた沢山の皆様に出会えたことに感謝致しますと共に、第 59 回国際学生会議に関わってくださった皆様に、心から御礼申し上げます。

以上を総務総括とさせていただきます。ありがとうございました。

各プログラム報告

開会式

開会式では参加者の顔合わせ、及び本会議開催を宣言する実行委員長の挨拶を行いました。司会は日本人参加者の代表者 2 名が務め、また参加者挨拶として、日本人・外国人参加者の代表者各 1 名より本会議へ向けた心境・意気込みを述べていただきました。(写真左：外国人参加者代表挨拶の様子、写真右：司会者)



基調講演

第 59 回国際学生会議の開会式では、後援をいただいた経済人コー円卓会議日本委員会の事務局長である石田寛様に基調講演をお願いいたしました。ご講演の中では、「 $1+1=?$ 」という質問から始まり、本会議におけるディスカッション及び、7 日間を通して築く世界との繋がり的重要性についてお話をいただきました。参加者全員が本会議へ向けてさらに気持ちを高めることができました。(写真：経済人コー円卓会議日本委員会の石田様のご講演の様子)



各国文化紹介

ISC59 では、その参加国の多様さを活かし文化紹介を行いました。参加者にとって互いの文化の新たな発見の場になるよう、国を紹介するムービーを流すだけでなく、各国・地域の参加者におもちゃ・衣装・歌・踊りの中からひとつテーマを選んでもらい、「独特の文化」の発表を行ってもらいました。発表はクイズ形式を交えて行ったため、大いに盛り上がりました。



日本文化体験

本会議 2 日目に行われた日本文化体験では、京都府立ゼミナールハウスよりご紹介いただいた川尻様・松原様・蒲生様を講師としてお迎えし、日本の伝統工芸品であるトンボ玉・万華鏡・箸作りの体験を行いました。日本人参加者と外国人参加者が互いに説明し合い、共に作品の完成を喜び合う姿が見られ、伝統的な作品制作という文化交流を通じ、この場においても互いの文化を知り、認め合うというような経験ができたようです。



カフェトーク

各国への勝手なイメージや先入観を見直し、払拭する試みとして、カフェトークを行いました。事前に参加国に対するイメージのアンケートをとり、そのアンケートを元に質問を作成しました。当日は各グループでその中の質問を取り上げ、互いに質問し合い、応え、実際の互いの文化・習慣・価値観について談話してもらいました。知らず知らずのうちに色眼鏡で外国人を見ていたことに気づかされる場となったでしょう。

また、各国・地域のお菓子をもち寄ってもらい、食べながら話すことでカフェトークを行いました。「お菓子」という誰しもが興味のある話題をアイスブレイクとして用意しておいたことで、率直に相手に自国の価値観を述べやすい雰囲気になっていたと思います。



本会議研修旅行

本会議 5 日目の 8 月 30 日に実施しました。亀岡よりトロッコ列車にて移動後、嵐山を散策し、午後は 2 コース(清水寺コース・青蓮院門跡コース)に分かれて京都の名所を班ごとに周りました。情緒あふれる京都の名所を周ることで、連日のディスカッションでの疲れを癒すことができ、外国人参加者だけでなく日本人参加者にとっても古都を堪能できた一日となりました。



成果発表会

国際学生会議では、各テーマの参加者が分科会で話し合った成果を一般公開する場としてプレゼンテーションをプログラム最終日に行っています。本年度第 59 回では、プレゼンテーション及び質疑応答を行いました。質疑応答時間を設けることで参加者のみならず見学者の方にも其々の問題を考えていただける時間となり、会議目標の一つである社会発信を達成することができました。



ウェルカム・フェアウェルパーティー

ウェルカムパーティーでは、参加者全員の緊張をほぐすことを目的とし、食堂にて 5 グループに分かれ食事を共にしました。京都府立ゼミナールハウスに到着するまでの長い旅路の疲れを感じさせない良いスタートとなりました。

本会議最後のプログラムであるフェアウェルパーティーでは、1 週間を共に過ごした仲間との別れを惜しみ、涙を流す参加者も多くいました。互いの文化の違いの理解を果たし、絆を深めた瞬間でした。



閉会式

閉会式も開会式同様、日本人参加者の 2 人に司会を務めていただきました。閉会式では、国際教育振興会賛助会会長の南原様にお話をいただき、本会議を通して学び、経験したことを振り返ることができました。また、実行委員長による閉会の挨拶、日本人及び外国人参加者の代表者各 1 名より挨拶をいただき、その後集合写真を撮り閉会式は終了となりました。参加者の思いが 1 つになったような雰囲気と感じさせるものでした。(写真左：国際教育振興会賛助会会長南原様にお話を頂いた様子)



第5章 参加者の感想

ISC59 の感想

ISC59 の感想

広島市立大学 4年 亀本知可子

私には、1年間の留学経験がありましたが、帰国後、ただ何となく学生生活を送るのはもったいない、留学経験を活かして何かしたいと考えていたときに、インターネットでこのISCを見つけて、応募させて頂きました。応募したときは、自分が受かると思っていなかったのですが、参加が決まったときはとても嬉しかったです。それと同時に、自分の英語力、知識量に不安を感じました。テーブルメンバーと、何度も勉強会やスカイプでの話し合いを重ねて行くうちに、皆同じ不安を抱えている事が分かり、互いに支え合いながら準備を進めて行く事ができました。勉強会では、意見の違いや、考えをうまく伝えられない事から、衝突することや、話し合いが行き詰まる事が何度もありました。そのときは、いらだちや焦りがありましたが、今思うと、それでも妥協せずに、全員が納得し分かり合えるまで何度も話し合ったからこそ、サマリーのプレゼンテーションが成功したのだと思います。

本会議が始まり、長時間にわたる英語のディスカッションに、体力的にも精神的にも疲労し、言語の壁にぶつかったりメンバーとの考え方の違いに悩んだり、衝突する事も多々ありました。しかし、時間をかけて話し合っていくうちに、テーブルメンバー全員の意見を組み入れた結論を出す事ができました。サマリー発表も、練習通りではありませんでしたが、自分たちの納得のいく発表ができました。はじめに感じていた不安や、言語や心の壁は、最後には少しもなくなっていたように思います。

ディスカッション以外でも、各国文化紹介や本会議研修旅行などの活動や、他の参加者との共同生活で、国際交流をすることができ、他国の文化を知り、理解する事ができました。話を聞いたり、本を読んだりして、異文化のことを学ぶよりも、このような体験の方が異文化を肌で感じる事ができ、異文化理解、多文化共生に繋がると感じました。なにより、これらの活動を通して、他テーブルの参加者ととても仲良くなる事が出来たことがよかったです。

私がこのISC59を通して一番感じた事は、人とのつながりの大切さ、素晴らしさです。もちろん、会議中に話し合った事も大切であり、将来につながると思います。しかし、私はそれ以上に、ISC参加者から多くの刺激を受け、新しい視点を与えられたことが自分の中ではとても大きな財産になったと思います。会議中、たくさんぶつかることもありましたが、その分、国籍関係なく参加者と仲良くなる事ができ、一生涯の友人がたくさんできました。実際に、ISC59

が終わったいまでも、連絡を取り合ったり、実際に会ったりしていますし、ISC59参加者の現在の活動を見て刺激を受け、自分も頑張ろうと感じます。ISCは、本会議の一週間だけでなく、未来に繋がるものだと思います。本会議は短かったですが、その間に得たものはもっと大きいと感じています。ISCに参加していなかったら出会えなかったであろう人たちに出会えたことを奇跡のように感じます。そして、これからも、この出会いを大切にしていきたいと思っています。参加させていただけて本当によかったです。

東京大学1年 山口絵理子

大学1年生の夏休み。何かしらの海外活動をしたと思っていたものの、色々な理由で海外に行くことは叶わず、何か日本でできることはないかと探していた時、丁度このプログラムのことを知りました。今年は西日本開催で、参加費もアルバイトで賄える範囲、そして何より海外の学生と英語でディスカッション、ということに魅力を感じすぐに応募を決めました。

初めはもちろん勝手もわからず、そして自分以外の参加者がみんな3年生だったこともあり、多少緊張したり、チームでうまくやっっていけるか不安になったりしました。ですが、会議全体に言えることですが、誰も学年や何を気にすることもなく何でも言える雰囲気、すぐに仲良くなることができました。事前研修旅行や外国人参加者の詳細が決まってからは、会議が楽しみで待ちきれませんでした。

会議中には、途中、中々ディスカッションがうまくいかず自分にイラついてしまう場面があったりもしましたが、最後の成果発表会ではみんなで最高のプレゼンテーションをすることが出来ました。

初めて英語で重いディスカッションをしたり、部分的にファシリテーターをさせてもらったり、事前勉強でもたくさん事を学んだり、会議に参加して良かったと思うことは数えきれないほどあります。そして、その中でも1番の収穫は、新しい人の繋がりがたくさんできたことです。日本の色々な大学から来た人たちだけでなく、海外からの参加者とも生活を共にして、他愛もない話をしたり、真剣にディスカッションをしたり、アルプス一万尺を教えてみたり…その中で、国と国、そして個人と個人の素晴らしい交流ができました。会議自体はたった1週間でしたが、これからも続いていく本当に大切な人の繋がりを得られて、心から幸せです。まだ会議が終わって1か月も経っておらず、他の日本人参加者と旅行も行ったのに、もう会いたくて仕方ないくらいです。長い時間をかけて会議を準備してくださった実行委員のみなさんと、参加者、特にテーブルのメンバーには、何とお礼を言えればいいかわかりません。

来年の会議には、実行委員として、あるいは参加者として、何らかの形でもう一度関わらせて頂きます。それまでに、英語だけでなく色々なことを勉強し成長して、今度はもっと会議に「貢献」できるよう努力したいと思います。

本当にありがとうございました。

John Joseph Jarloyan (the Philippines)

I cannot explain the joy and excitement I felt when my application to join the 59th International Student Conference got accepted. It was actually my second application since my first one didn't pass, but it didn't stop me from joining the ISC. I, along with my seven fellow Filipino delegates from our University, was chosen to go to Japan and for some it was their first time to go out of the country. Travelling abroad has always been my favorite interest. As a Psychology major, I want to learn and experience other cultures and that's one of the reasons why I took this opportunity to go to Japan.

The whole experience was very life-changing. From the Study Tour down to the main conference itself, every activity really served its purpose and that is to close the gap between different countries by forming friendships with one another. Language didn't become a barrier since we all understood each other even if we don't communicate in English, and that's one great thing about this experience. The most significant moment for me was during the Okayama ST. On the first day of ST I met a lot of new Japanese friends already. I can still recall the feeling of how warm they welcomed us even if they couldn't talk English very well. It was during the ST days that I realized how nice Japanese people are. During the 4-day tour around Okayama, I was lucky to experience a glimpse of Japanese culture and good thing I brought my camera with me. I took as many photos as I can so I can live each moment in Japan. Until now I still feel embarrassed for crying so hard during the farewell party in Okayama ST. That was one of my most embarrassing moments yet I treasure each moment of it.

ISC aims to bring together students from different countries to discuss about global issues that are happening at the moment. With each country having its own status and environment, everyone can learn from each other through a series of discussions and come up with the best solutions. It served as a great opportunity for us Filipinos to hear about other countries' point of view and at the same time to share our own as well. During the conference I learned a lot of things and I am really glad I joined this program. I learned that being the leader of my group (Philippines) is not an easy task. But I also learned to appreciate the responsibility and I've grown by learning from my mistakes. Every single centavo spent and every effort given to join ISC 59

was really worth it. I believe this was one of my best experiences ever and I will never forget everyone who has been part of this wonderful event in my life. So as the delegation head of the Filipino participants and in behalf of our country, “maraming salamat” (thank you so much), ISC! And more power!

第 59 回国際学生会議 事業報告書

発行責任者：和田 将彦

編集責任者：尾崎 仁美

発行：日本国際学生協会 第 59 回国際学生会議実行委員会
〒662-0891 兵庫県西宮市上ヶ原一番町 1-155
関西学院大学文化総部 I. S. A.